

2021 年度
医学部卒業生調査報告書

2023 年 5 月 20 日
統合教育学修センター・教学 IR チーム

目次

I.	目的.....	4
II.	方法.....	4
	対象者及び回答回収方法.....	4
	解析方法.....	4
III.	2021年度調査結果.....	4
	回答回収状況.....	4
1.	卒業生の現状.....	5
	専門の診療科・分野.....	5
	勤務・居住場所.....	5
	雇用形態.....	5
	勤務先.....	5
	収入(年収).....	5
	社会活動.....	6
	コロナ禍の影響.....	7
	プライベートの状況.....	9
	現在最も重点を置いている活動.....	9
2.	卒業後のキャリア構築方法.....	10
	これまでの経験した雇用形態・勤務先.....	10
	入局もしくは勤務先の選択.....	10
	キャリア構築に当たり相談した相手.....	14
	専門医資格の取得.....	14
	研究・学術活動.....	15
	海外在住, 留学の経験.....	16
3.	卒業生による本学教育カリキュラム評価.....	17
	キャリア構築に役立った本学のカリキュラム.....	17
	キャリア構築に役立った正規課程以外および卒後の経験.....	18
	入学時の入試区分と奨学金制度の利用.....	19
	大学の役割・後輩の育成に期待すること.....	19
4.	本学の理念・建学の精神の継承、母校愛の醸成.....	19
	大学の理念の実践.....	19
	建学の精神の実践.....	19
	卒業生の教育参画.....	20

子女の教育	21
5. 卒業後支援に関する要望.....	22
既存のリソースの認知度.....	22
本学キャリアサポートのニーズ調査.....	23
6. 卒業生の拠点としての大学の意義.....	24
7. 在学生へのメッセージ.....	24
8. 本調査への意見.....	24
IV. 2020年度との比較	25
(1)回答回収率	25
(2)卒業生の現状[就業・社会活動].....	26
(3)卒業生の現状[プライベート].....	26
(4)卒業後のキャリア構築方法.....	27
(5)卒業生による本学教育カリキュラム評価.....	28
(6)本学の理念・建学の精神の継承、母校愛の醸成.....	29
(7)卒業後支援に関する要望.....	30
V. まとめと今後の展望	31
回答回収率について.....	31
卒業生の現状	31
卒業生のキャリア構築.....	31
卒業生による本学カリキュラム評価.....	31
本学の理念・建学の精神の継承、母校愛の醸成	32
卒業後支援に関する要望	32

I. 目的

近年、医学教育のグローバルスタンダードとして、大学組織は卒業生の動向・業績を調査し、明らかになった実態や課題をカリキュラムの改善に反映させることが望ましいとされている。

そこで、本学医学部卒前・卒後教育の質を保証し、女性医師のキャリア構築を支える卒後サポートを実行するため、「卒業生の現状」、「卒業後のキャリア構築方法」、「卒業生による本学教育カリキュラム評価」、「本学の理念・建学の精神の継承、母校愛の醸成」および「卒業後支援に関する要望」を調査した。

II. 方法

対象者及び回答回収方法

卒後 5, 10, 20, 30, 40, 50, 60 年の卒業生を対象とした(表 1)。2021 年 12 月 23 日に調査の依頼状を郵送し、卒後 5 年から 40 年の対象者は Google Form、卒後 50 年、60 年は調査票の返送によって回答を回収した。回答締め切りは 2022 年 1 月 31 日であったが、目標の回収率に届かなかったため延長し、最終的には 2022 年 2 月 28 日(消印有効)とした。

解析方法

回答者全体の回答構成比と卒後年別の回答構成比を求めた。複数選択式の設問では、極端に選択数が少ない項目があったため、累積相対度数が 90%以上となる項目を「その他」に含めて再集計した。さらに選択された項目数の基礎統計量を求めた。

III. 2021 年度調査結果

回答回収状況

表 2 の通り、全体的な回答回収率は 43.6%であった。回収率が最も高い集団は卒後 20 年(53.8%)、最も低い集団は卒後 5 年であった(21.0%)。卒後 5, 10, 60 年は、他の卒年と比べ回答者が少なかったため、

卒後 5 年と 10 年、卒後 50 年と卒後 60 年を合わせて、卒後 5・10 年(34 名)、卒後 20 年(28 名)、卒後 30 年(41 名)、卒後 40 年(42 名)、卒後 50・60 年(35 名)の 5 つの集団に分けて解析を行った。

表 1 対象者数

	卒後							計
	5 年	10 年	20 年	30 年	40 年	50 年	60 年	
送付数	92	49	54	79	84	60	14	432
返却数	11	3	2	1	1	1	0	19
対象者数	81	46	52	78	83	59	14	413

表 2 回答回収状況

	卒後							計
	5 年	10 年	20 年	30 年	40 年	50 年	60 年	
対象者数	81	46	52	78	83	59	14	413
回答数	17	17	28	41	42	30	5	180
回収率(%)	21.0	37.0	53.8	52.6	50.6	50.8	35.7	43.6

1. 卒業生の現状

専門の診療科・分野

全体では、内科 33.0%、小児科 11.7%、皮膚科 8.6%の順に多かった。卒後 5・10 年は内科に次いで整形外科が多く、卒後 40 年では内科(28.3%)、小児科(17.4%)に続き、眼科(15.2%)が多い結果となった(図 1)。

勤務・居住場所

南関東(東京・神奈川・千葉・埼玉)67.4%、北関東(茨城・栃木・群馬)6.7%、中部 6.7%、近畿 6.2%の順に多く、卒年別でも南関東が突出して多かった(図 2)。

雇用形態

常勤勤務者(経営者、管理者、指導者除く)29.5%、経営者 25.8%、非常勤勤務者(経営者、管理者、指導者除く)18.9%の順に多かった。退職者は 4.7%であった。卒後 5・10 年は常勤勤務者、卒後 20 年は非常勤勤務者、卒後 30 年より上の集団は経営者の占める割合が大きかった(図 3)。

勤務先

診療所・クリニック 40.7%、その他の病院(大学病院、臨床研修病院、診療所・クリニック以外)12.9%、臨床研修病院(大学病院除く)11.5%の順に多かった。卒後 5・10 年は、女子医大以外の医療系大学・大学病院が多く、卒後 20 年より上では診療所・クリニックが多かった(図 4)。いずれの卒年も勤務先の数の中央値は 1 で兼務は少ないと考えられる(表 3)。

収入(年収)

「500 万円未満」33.7%、「1 千万円以上 2 千万円未満」32.0%、「2 千万円以上」14.0%の順に多かった。

卒後 5・10 年は「500 万円未満」、20 年は「1 千万円以上 2 千万円未満」の占める割合が大きかった。卒後 30 年より上は「500 万円未満」と「1 千万円以上 2 千万円未満」が同程度であった(図 5)。

表 3 勤務先の数の基礎統計量【単位:件】

	卒後					全体
	5・10 年	20 年	30 年	40 年	50・60 年	
平均	1.1	1.2	1.3	1.1	1.4	1.2
最大値	3	3	4	2	5	5
最小値	1	1	1	1	1	1
中央値	1	1	1	1	1	1
合計	36	33	50	41	38	198
有効回答数	32	28	40	38	27	165

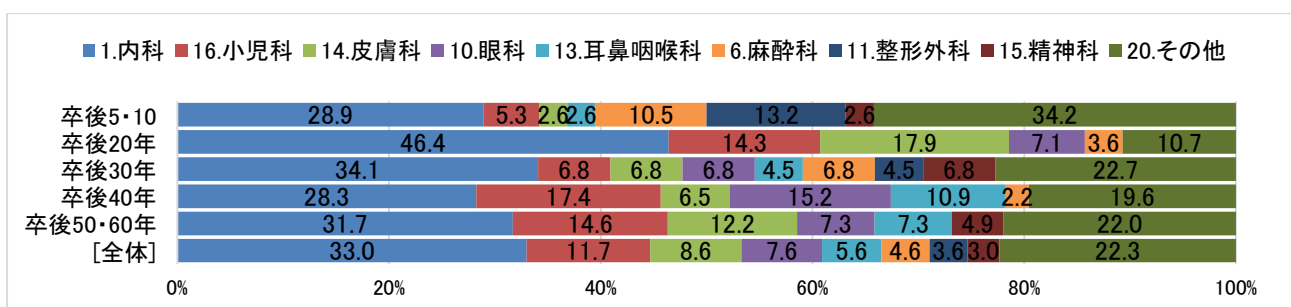


図 1 専門の診療科・分野【単位:%】

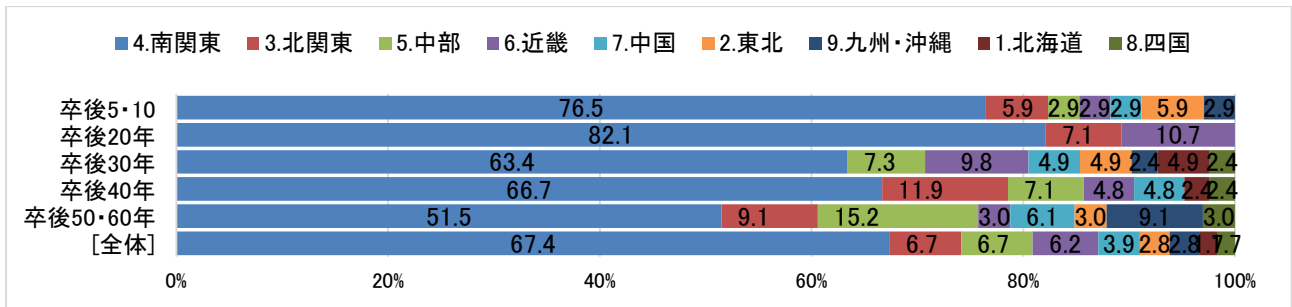


図2 勤務・居住場所【単位：%】

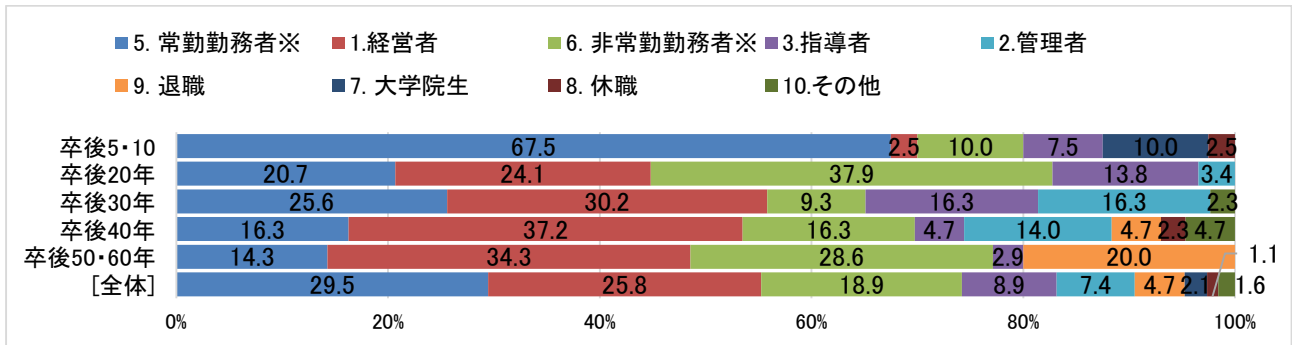


図3 現在の雇用形態【単位：%】 ※常勤勤務者、非常勤勤務者に経営者、管理者、指導者は含まれない

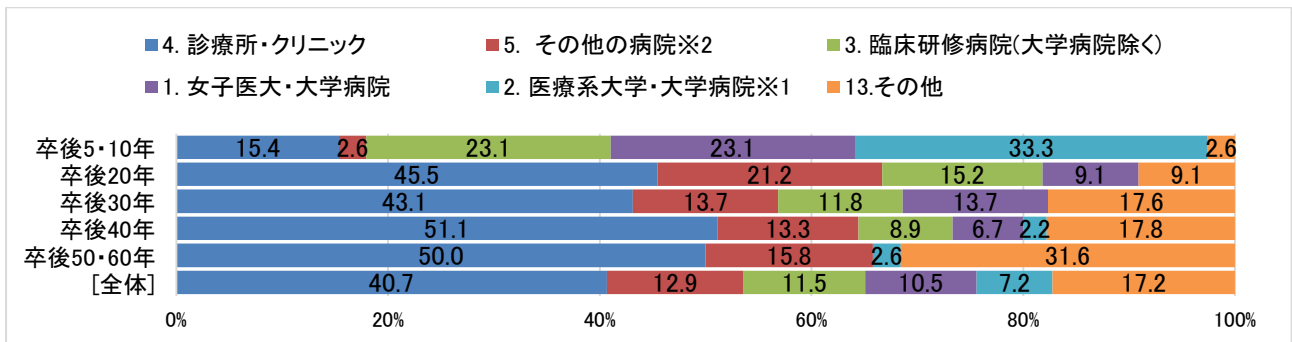


図4 現在の勤務先【単位：%】 ※1 女子医大除く ※2 医療系大学・大学病院、臨床研修病院、診療所・クリニックのいずれでもない

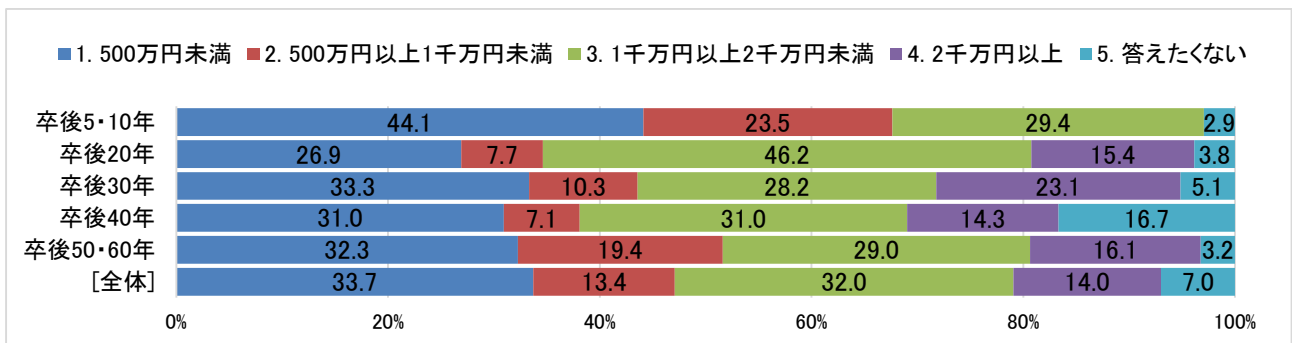


図5 収入【単位：%】

社会活動

全体の49.4%が社会活動に参加しており、卒後40年の参加率が最も高かった(69.0%)。社会活動の種類は「校医」34.8%、「その他団体理事・役員(至誠会、医師会、専門学会以外)」、「医師会委員会委員」9.8%の順に多く、卒後5・10年、20年以外は全体と同様の傾向であった。卒後5・10年は「校医」に次いで「至誠会社員」、卒後20年は「医師会委員会委員」が多かった(図6)。表4より、最も多い人は、同時に4件の社会活動に参加していた。

過去に参加したことがある社会活動は、「校医」36.2%、「医師会委員会委員」13.8%、「その他の団体理事・役員(至誠会、医師会、専門学会以外)」12.8%の順に多かった。卒後5年ではこれまで参加した社会活動を挙げた者がおらず、卒後10年の1名は「産業医」を選択していた。卒後20年は「校医」と「医師会委員会委員」、「その他」の3項目で構成されているが、卒後30年より上の集団は活動の種類が多様であった(図7)。

表4 参加している社会活動数の基礎統計量【単位:件】

	卒後					全体
	5・10年	20年	30年	40年	50・60年	
平均	1.3	1.3	1.4	1.6	1.4	1.4
最大値	2	3	2	3	4	4
最小値	1	1	1	1	1	1
中央値	1	1	1	1	1	1
合計	4	10	25	42	30	111
有効回答数	3	8	18	27	21	77

表5 過去に参加した社会活動数の基礎統計量【単位:件】

	卒後					全体
	10年	20年	30年	40年	50・60年	
平均	1.0	1.3	1.4	1.5	2.0	1.6
最大値	1	2	3	3	5	5
最小値	1	1	1	1	1	1
中央値	1	1	1	1	2	1
合計	1	5	18	29	48	101
有効回答数	1	4	13	20	24	62

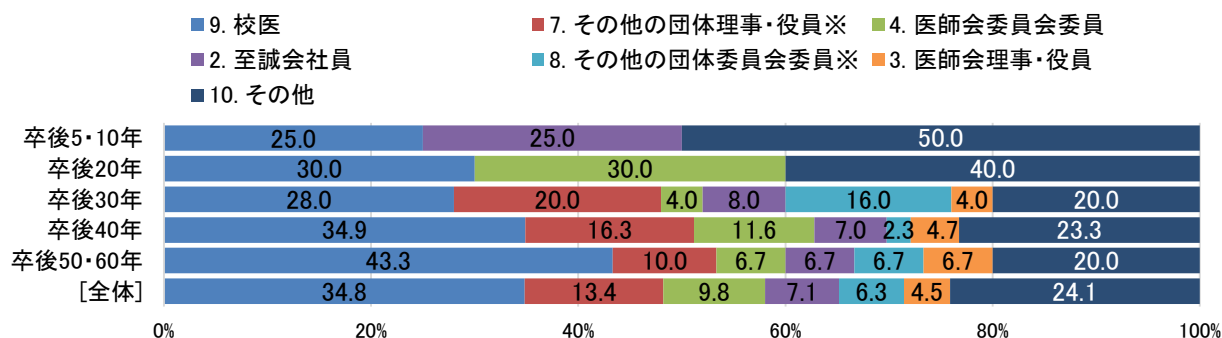


図6 現在参加している社会活動の種類【単位:%】※至誠会、医師会、専門学会を除く

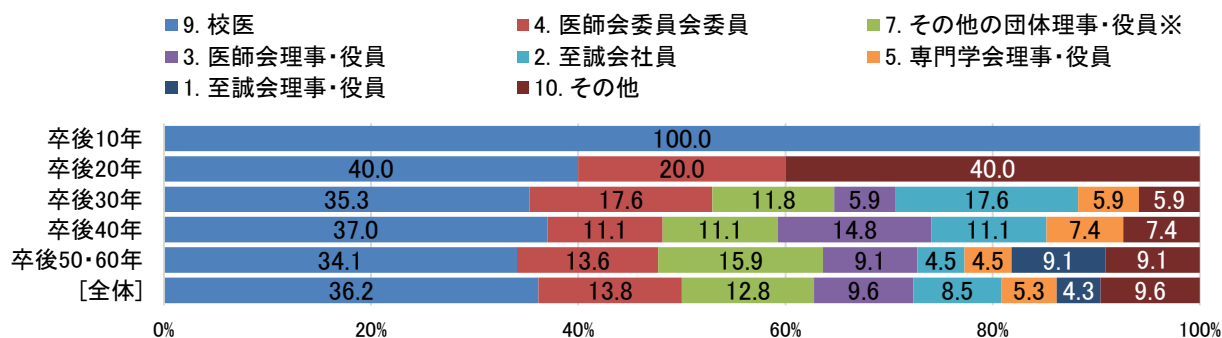


図7 過去に参加したことがある社会活動の種類【単位:%】※至誠会、医師会、専門学会を除く

コロナ禍の影響

影響の有無

全体の74.3%が、医療や活動への影響があると回答しており、卒後年別にみても同様の傾向であった(図8)。

コロナ禍とICT 導入の関連

普段使っている IT 機器は「パソコン」が 40.7%、「スマートフォン」が 36.5%であった。また IT 機器を使って行っている作業は「インターネット検索」23.1%、「メール」21.6%であった。普段使っている IT 機器、IT 機器を使って行う作業の内訳はいずれの卒後年も同様の結果であった(図 9、図 10)。

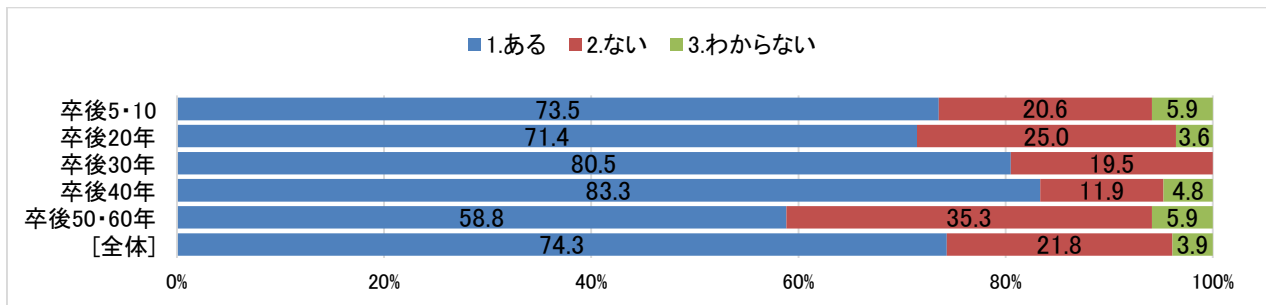


図 8 コロナ禍の影響の有無【単位:%】

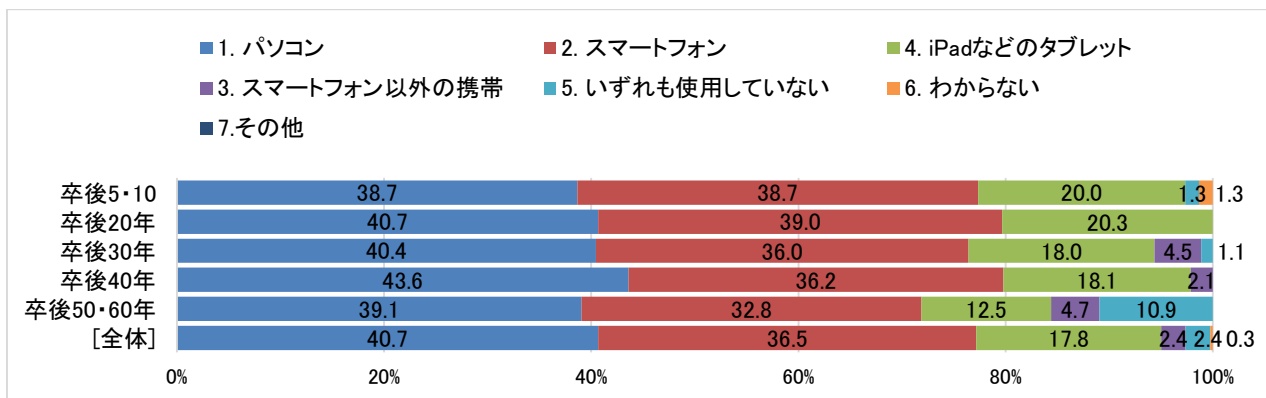


図 9 普段使用している IT 機器【単位:%】

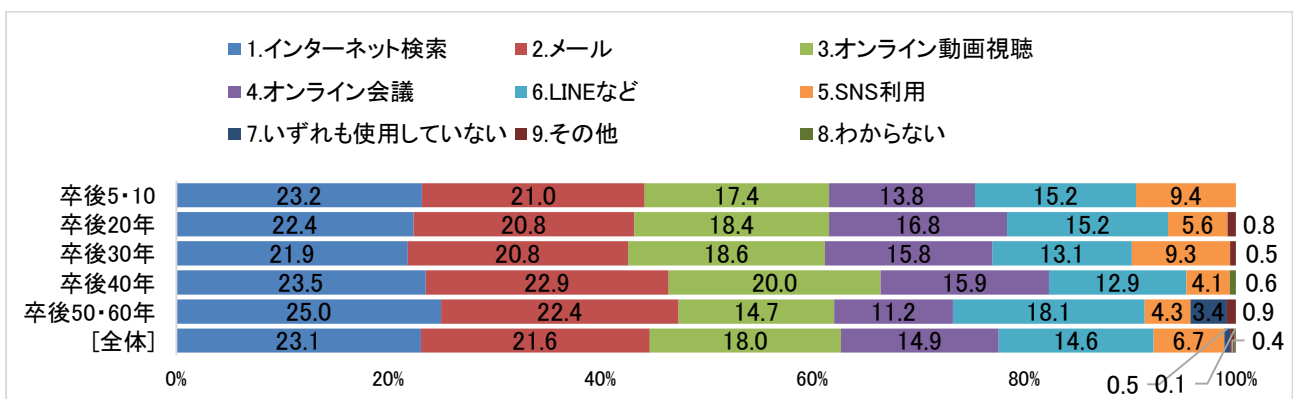


図 10 IT 機器を使って行う作業【単位:%】

プライベートの状況

子育て支援について

該当者は 72.4%であった。該当者のうち「ある」が 88.1%で突出して多く、卒後年別にみても同様の結果であった(図 11)。

介護支援について

該当者は 42.8%であった。該当者のうち「ある」は 59.2%であった。卒後年別では、卒後 40 年、50・60 年は「ある」がともに 73.3%であったが、卒後 20 年は「ある」より「ない」の方が多かった(図 12)。

現在最も重点を置いている活動

全体では「家族との時間」(38.8%)、「自己研鑽」(21.3%)、「キャリア」(13.7%)の順に多かった。卒後年別では、卒後 20 年、30 年、40 年は全体と同様の結果で、特に卒後 20 年は「家族との時間」が突出して多く挙げられていた(82.1%)。卒後 5・10 年は「家族との時間」と「キャリア」、卒後 50・60 年は「自己研鑽」と「余暇活動」が多く挙げられ、全体とやや異なる結果であった(図 13)。

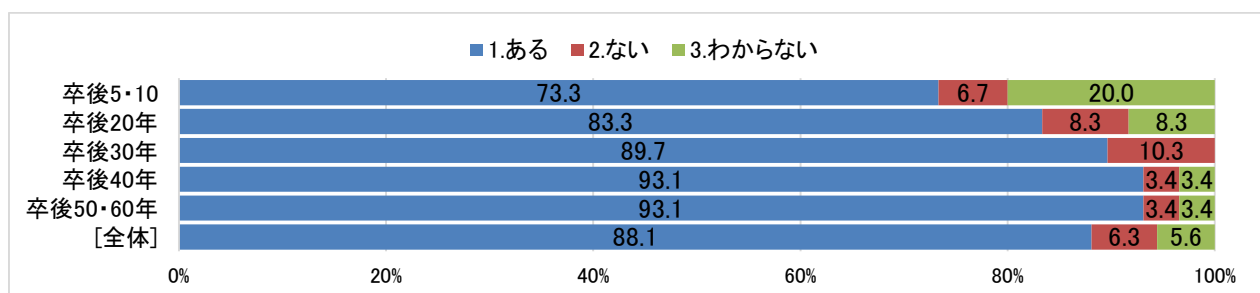


図 11 子育て支援の有無(該当者のみ)【単位:%】

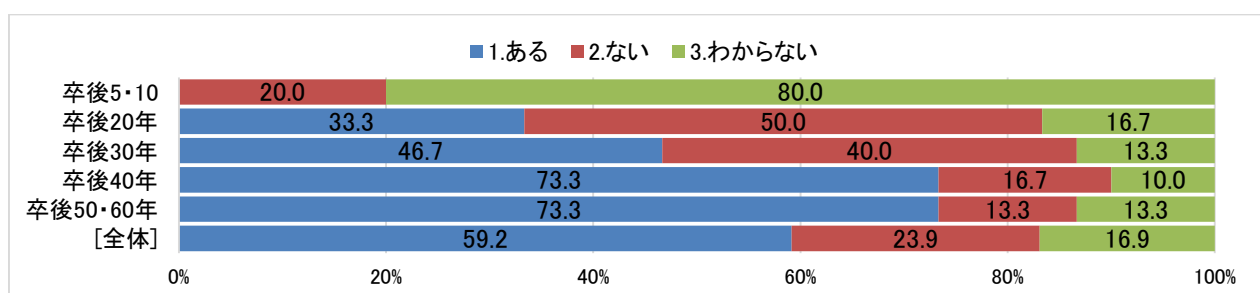


図 12 介護支援の有無(該当者のみ)【単位:%】

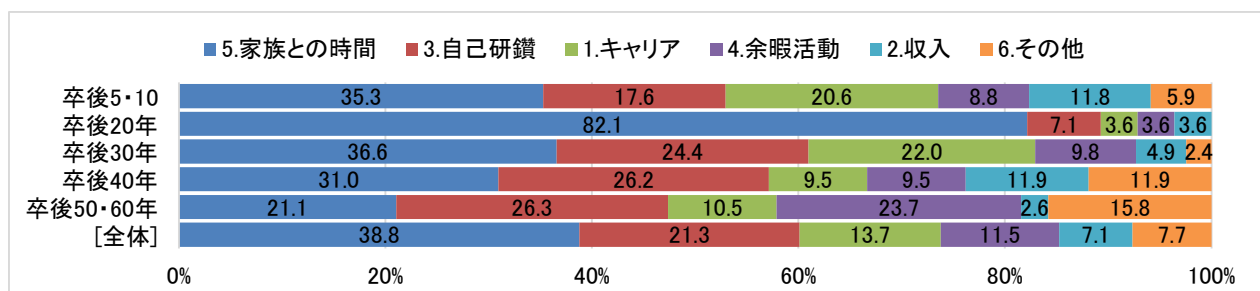


図 13 現在最も重点を置いている活動【単位:%】

2. 卒業後のキャリア構築方法

これまでの経験した雇用形態・勤務先

雇用形態は、「常勤勤務者(経営者、管理者、指導者除く)」42.6%、「非常勤勤務者(経営者、管理者、指導者除く)」20.2%、「指導者」12.0%の順に多かった。卒後年別では、卒後 20 年より上の集団から「指導者」、卒後 30 年より上の集団から「経営者」及び「管理者」が挙げられていた(図 14)。

勤務先は「診療所・クリニック」22.0%、「女子医大・大学病院」19.9%、「臨床研修病院(大学病院除く)」16.3%の順に多かった。卒後 5・10 年は「女子医大以外の医療系大学・大学病院」の占める割合が最も大きかった。卒後 20 年より上では、いずれの集団にも「診療所・クリニック」が 25%程度見受けられる。卒年が上の集団ほどその他が占める割合が大きく、勤務先が多岐に渡っていた(図 15)。

入局もしくは勤務先の選択

大学卒業直後

全体では「本学関連病院」が 61.7%、「本学以外の大学病院」が 26.7%、「民間・公的病院」が 11.1%であった。卒後年別でも全体と同様の結果だが、卒後 5・10 年のみ半数以上が他大学病院あるいは民間・公的病院へ就職していた(図 16)。各勤務先を選んだ理由の構成比は図 17 の通り。

本学関連病院を選んだ理由 出身大学(母校)関連のため(15.5%)、多数の症例を経験できる(11.7%)、高度な症例を経験できる(10.3%)、専門的な興味(9.7%)の順に多かった。

本学以外の大学病院を選んだ理由 多数の症例を経験できる(17.1%)、自宅・実家が近いため(17.1%)、高度な症例を経験できる(13.2%)、指導体制・教育の質が高い(7.8%)の順に多かった。

民間・公的病院を選んだ理由 多数の症例を経験できる(16.5%)、救急・緊急症例を経験できる(11.0%)、頻度の高い症例を経験できる(11.0%)、指導体制・教育の質が高い(8.8%)の順に多かった。

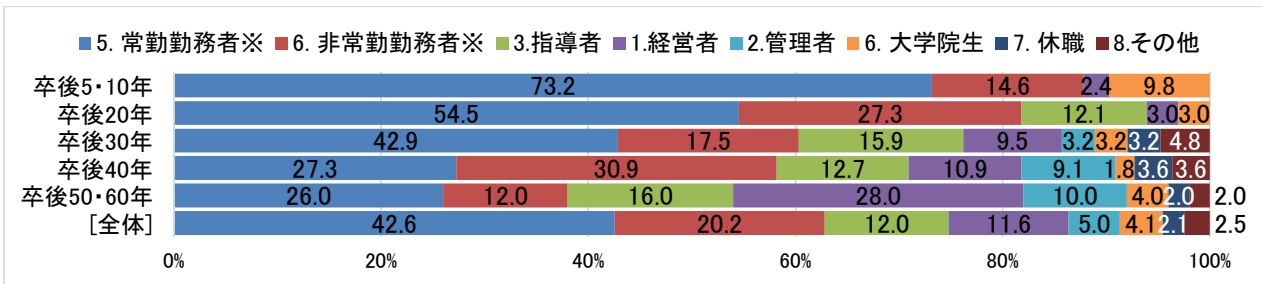


図 14 これまで経験した雇用形態【単位：%】※常勤勤務者、非常勤勤務者に経営者、管理者、指導者は含まれない

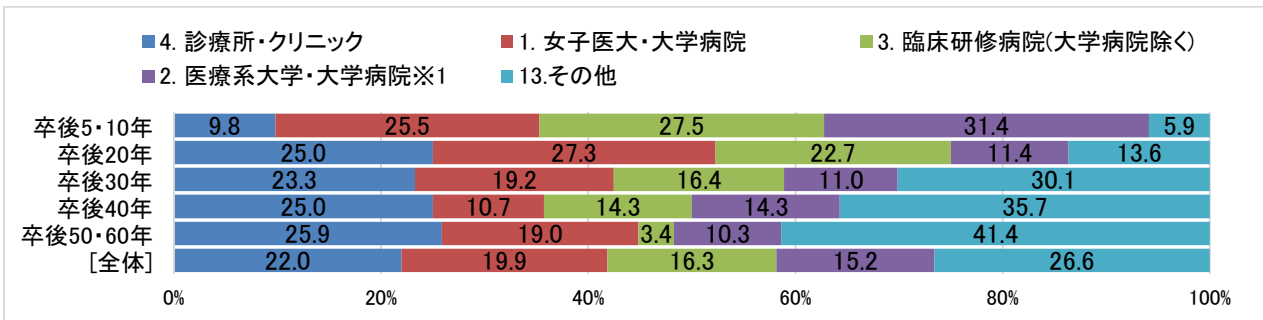


図 15 これまで経験した勤務先【単位：%】※1 女子医大除く

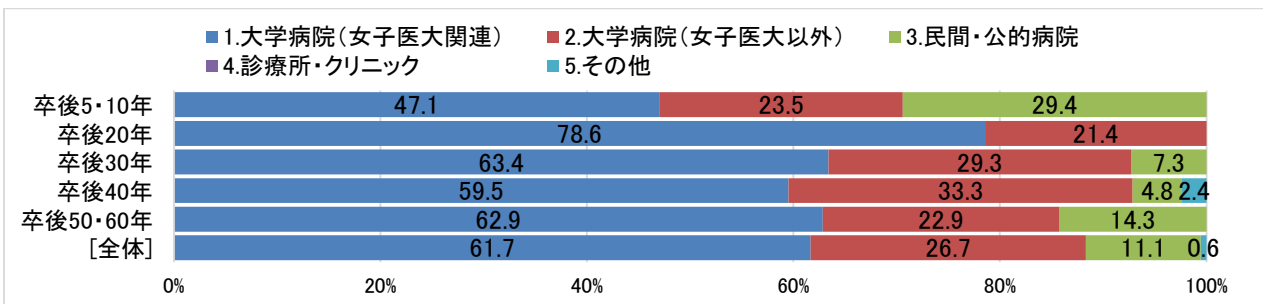


図 16 卒業直後の入局もしくは勤務先【単位：%】

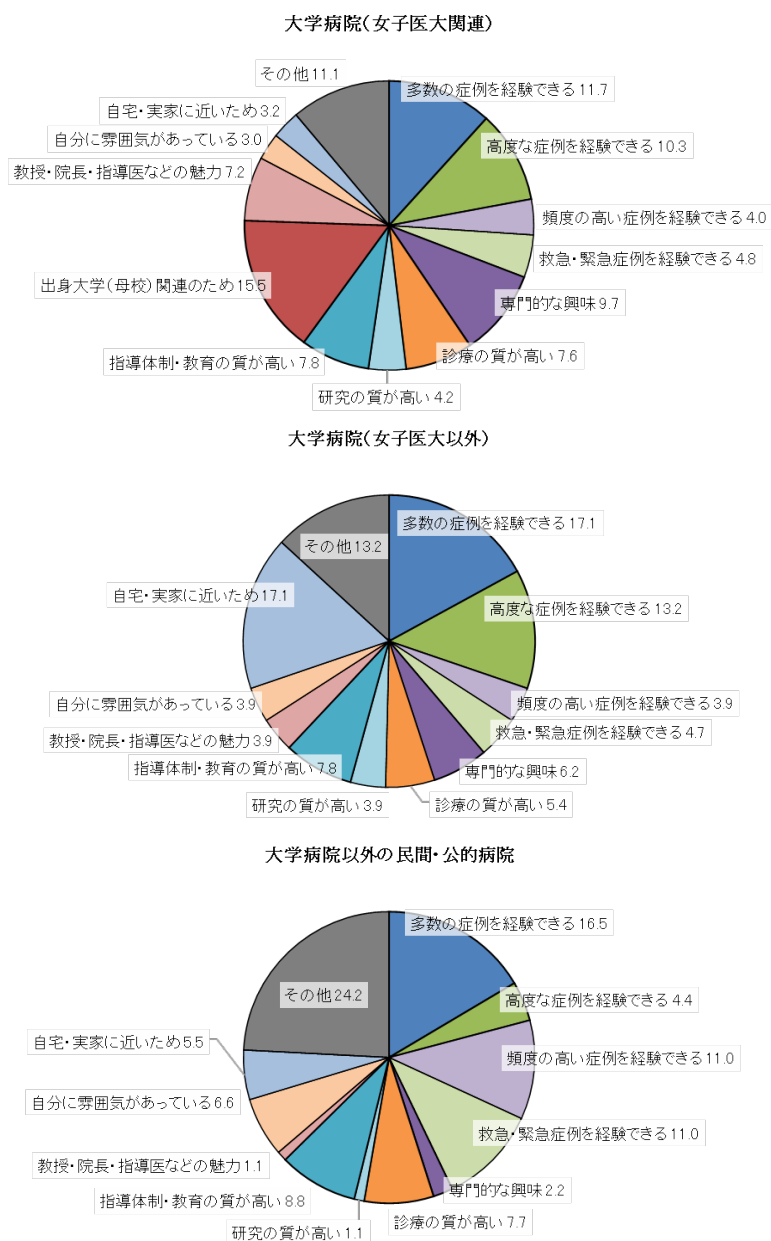


図 17 卒業直後の入局先・勤務先別、選択した理由【単位:%】

初期臨床研修直後(卒後5年・10年のみ)

「本学関連病院」44.1%、「本学以外の大学病院」38.2%、「民間・公的病院」が14.7%の順に大きく、卒業直後の入局先と同様の結果であった。卒後5年の方が本学以外の大学病院の占める割合が大きかった(図18)。各勤務先を選んだ理由の構成比は図19の通り。

本学関連病院を選んだ理由 出身大学(母校)関連のため(18.6%)に次いで、高度な症例を経験できる(13.6%)、多数の症例を経験できる(10.2%)、専門的な興味(10.2%)が多かった。

本学以外の大学病院を選んだ理由 高度な症例を経験できる(17.0%)、多数の症例を経験できる(17.0%)、指導体制・教育の質が高い(10.6%)の順に多かった。

民間・公的病院を選んだ理由 多数の症例を経験できる(14.3%)が最も多かった。

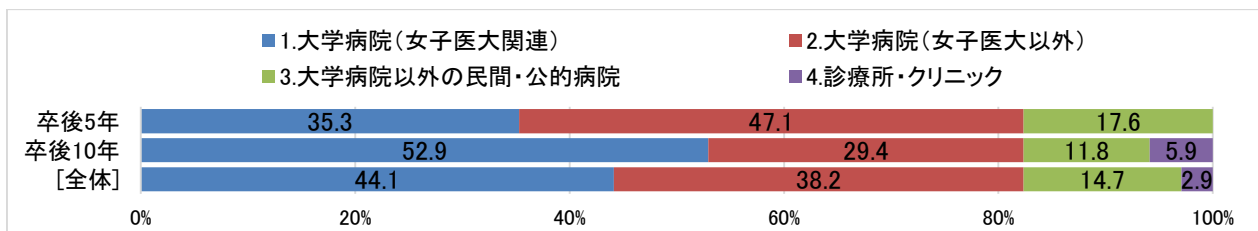


図 18 初期臨床研修直後の入局もしくは勤務先【単位:%】

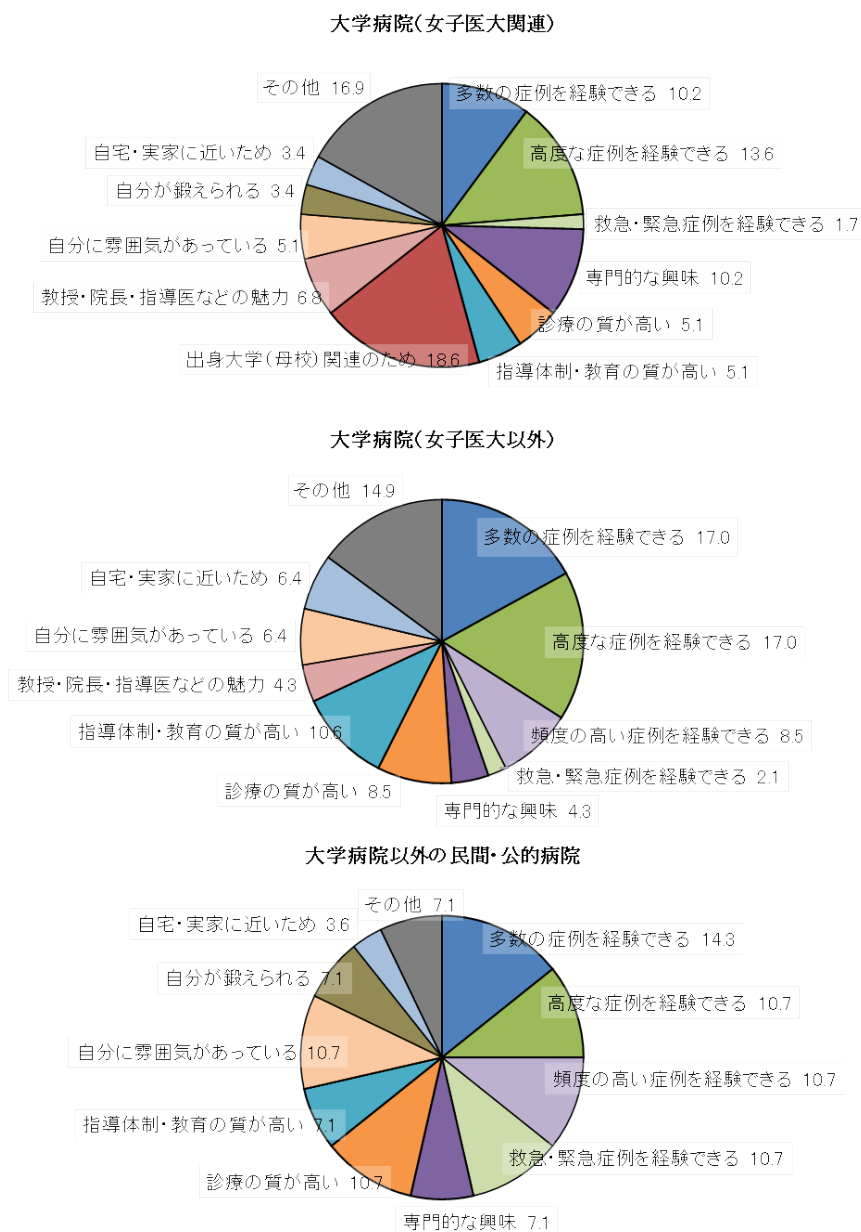


図 19 初期臨床研修直後の入局もしくは勤務先別 選択した理由【単位:%】

キャリア構築に当たり相談した相手

父 23.9%、母 21.1%、パートナー16.9%の順に多かった。卒後年別でも同様の傾向であった。

表 6より相談相手として選択した項目の平均値は2.7であった。卒後5・10年の方が卒後30年より平均値、中央値ともに大きく、相談相手が多いと考えられる。

表 6 相談相手として選択した項目数の基礎統計量【単位:件】

	卒後					全体
	5・10年	20年	30年	40年	50・60年	
平均	3.4	3.2	2.4	2.4	2.3	2.7
最大値	9	6	6	5	8	9
最小値	1	1	1	1	1	1
中央値	3	3	2	2	2	2
合計	110	80	84	87	70	431
有効回答数	32	25	35	37	30	159

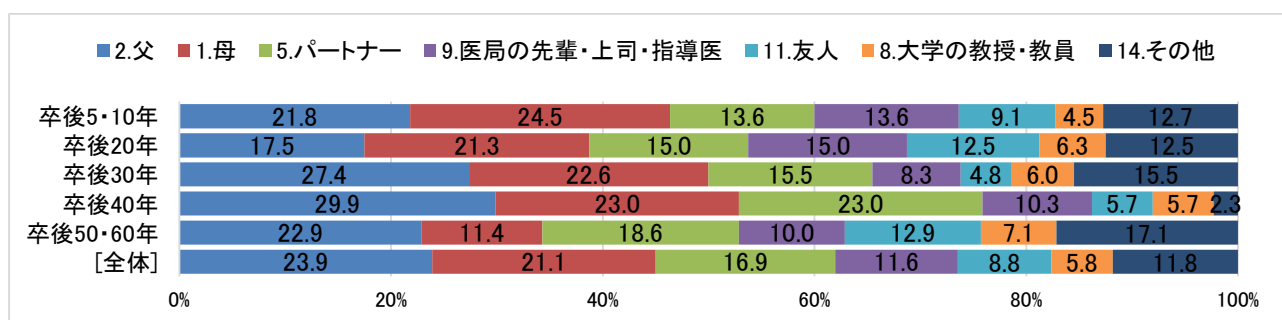


図 20 相談相手として選択した項目の内訳【単位:%】

専門医資格の取得

卒後5年17名中、2名が「いいえ」、15名は「取得可能な経験年数に達していない」と回答していたため卒後10年より上の集団を集計した。全体では79.6%が専門医資格を取得した経験があり、現在資格を所持している人は72.8%であった。卒後年別では、いずれの集団も70%以上が資格を取得した経験があると回答していた。卒後30年より上の集団で資格を維持していない人が見受けられる(図 21)。

表 7の取得したことがある専門医資格数から、卒後20年のみ資格数の中央値が2で、複数の資格を取得した人が多かった。最も多い人は4種類の資格を取得した経験があった。

表 7 取得したことがある専門医資格数基礎統計量【単位:件】

	卒後					全体
	10年	20年	30年	40年	50・60年	
平均	1.1	1.9	1.4	1.4	1.2	1.4
最大値	2	4	3	3	3	4
最小値	1	1	1	1	1	1
中央値	1	2	1	1	1	1
合計	15	35	41	41	26	158
有効回答数	14	18	30	29	21	112

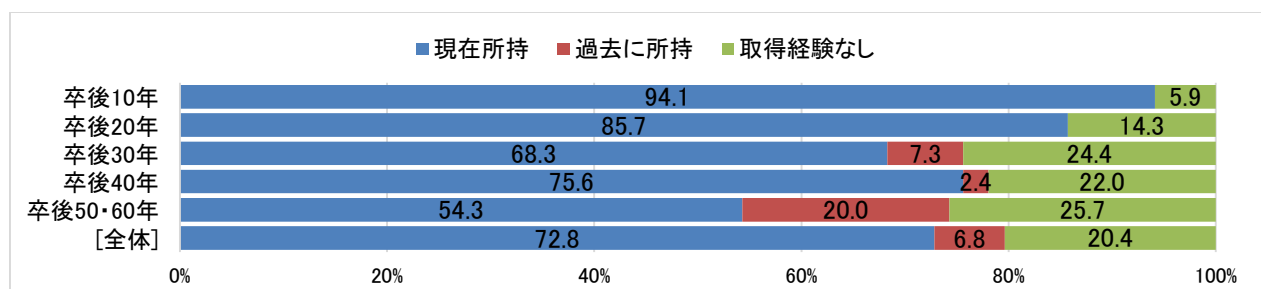


図 21 専門医資格の取得状況【単位:%】

研究・学術活動

学位の取得(取得見込み含む)

卒後 5 年 17 名中 2 名(11.8%)、卒後 10 年 17 名中 3 名(17.6%)が大学院在学中で、この 5 名を除外して集計を行った。学位を取得した人は全体の 39.0%であった。卒後 10 年は学位取得者が 21.4%、卒後 30 年、40 年は 50%程度が取得していた(図 22)。

学位取得者のうち、30.9%が甲類(大学院にて取得)であった。卒後 10 年を除き、各卒後年の学位取得者のうち半数以上が乙類であった(図 23)。また、70.6%が本学において学位を取得していた。いずれの卒後年も 50%以上が本学で取得しており、卒後 20 年は特に多かった(88.9%)(図 24)。

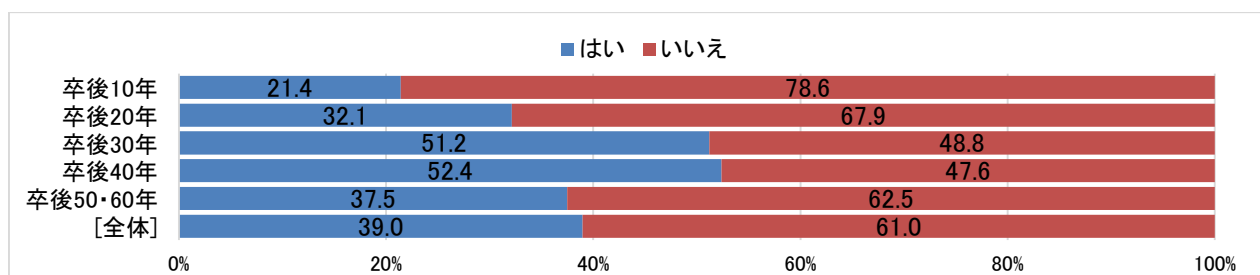


図 22 学位取得者内訳【単位:%】

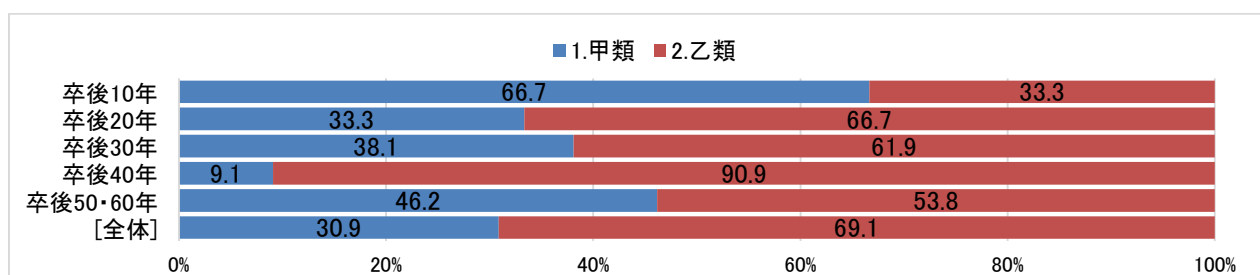


図 23 学位の種類内訳【単位:%】

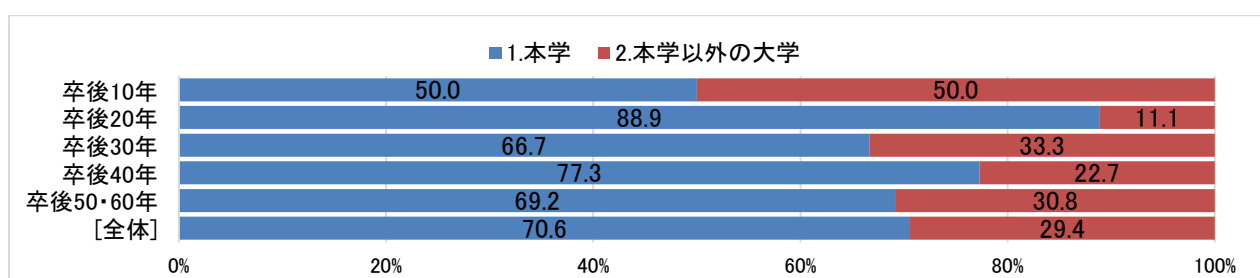


図 24 学位取得場所【単位:%】

学会参加

参加する頻度は、「年に 2~4 回」(50.0%)、「年に 1 回程度」(17.8%)、「年に 5 回以上」(15.0%)の順に多かった。卒後年別でも同様の傾向がみられた(図 25)。

参加の目的は、「専門領域の最新知識を得るため」(39.2%)、「専門領域の意見交換をするため」(13.6%)、「演題を発表するため」(11.7%)の順に多かった。卒後年別では、卒後 5・10 年は「演題を発表するため」(30.6%)、卒後 50・60 年は「単位取得のため」(25.0%)が多く、全体とは異なる傾向があった(図 26)。

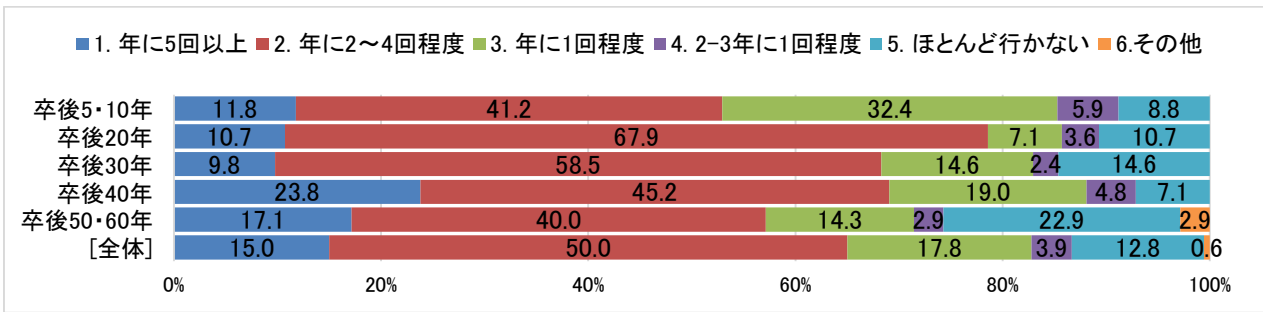


図 25 学会参加の頻度【単位:%】

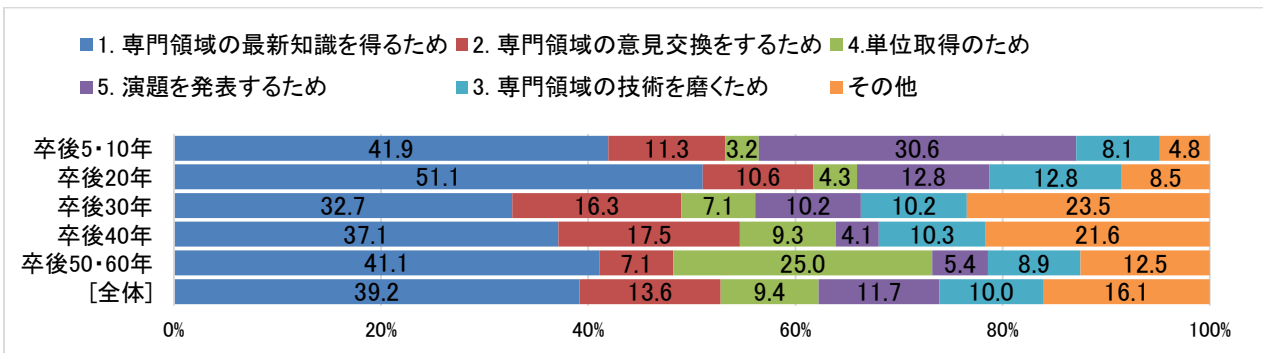


図 26 学会参加の理由【単位:%】

海外在住, 留学の経験

海外在住の経験者は全体の 10.1%であった。卒後 5・10 年には経験者がいなかった(表 8)。

平均留学年数は 1.9 年、中央値は 2 年、最も長い人は 3 年留学していた(表 9)。留学目的は、研究 50.0%、その他 34.5%で(表 10)、その他では、家族に伴って海外在住した人が多かった。

表 8 海外在住経験者数【単位:人】

	卒後				全体
	20年	30年	40年	50・60年	
経験者数	4	2	5	7	17
卒後年別(%)	14.3	5.0	11.9	20.0	10.1

表 9 留学年数【単位:年】

	卒後				全体
	20年	30年	40年	50・60年	
平均	2.3	2.3	2.0	1.5	1.9
最大値	3	2.5	3	2.5	3
最小値	1	2	1	1	1
中央値	2.5	2.25	2	1.25	2

表 10 留学目的【単位:%】

	卒後				全体
	20年	30年	40年	50・60年	
1.研究	25.0	100	60.0	42.9	50.0
2.臨床	25.0	0	20.0	14.3	15.4
3.その他	50.0	0	20.0	42.9	34.6

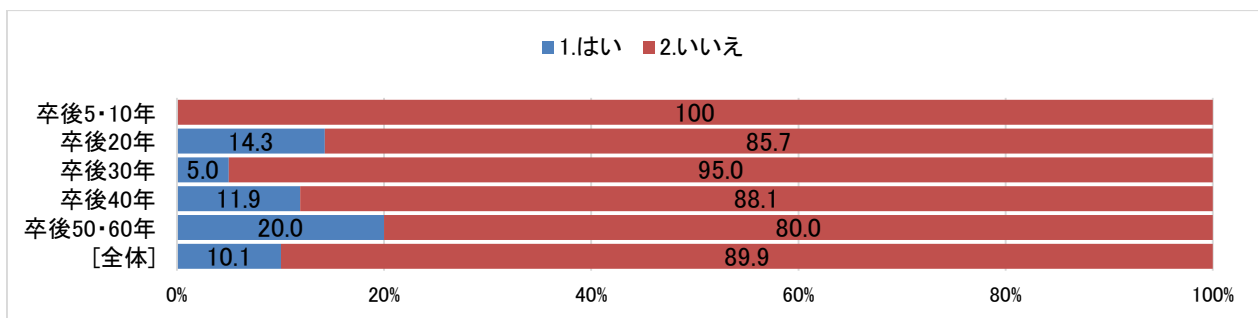


図 27 海外在住経験【単位:%】

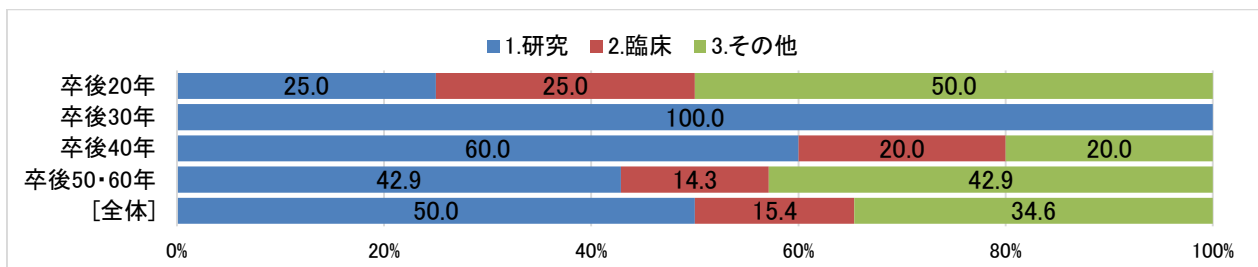


図 28 留学目的【単位:%】

3. 卒業生による本学教育カリキュラム評価

キャリア構築に役立った本学のカリキュラム

カリキュラムの選択肢は、下記の 10 項目で、卒後 50, 60 年は自由記述式、その他の卒年は複数選択式であった。どれも役に立っていないは、全体の 1.5%であった。

1.一般教育	2.基礎医学講義	3.基礎医学実習	4.臨床医学講義
5.臨床実習	6.チューリアル	7.TBL	8.医療倫理、人間関係教育
9.その他	10.どれも役立っていない		

卒後 30 年より上はカリキュラムにチューリアルが含まれていないため、卒後 30 年を境に別に集計した。いずれの卒年も、最も選択されていたカリキュラムは臨床実習であった。卒後 5-20 年はチューリアル、卒後 30, 40 年は臨床医学講義が次に多く選択されていた(図 29、図 30)。

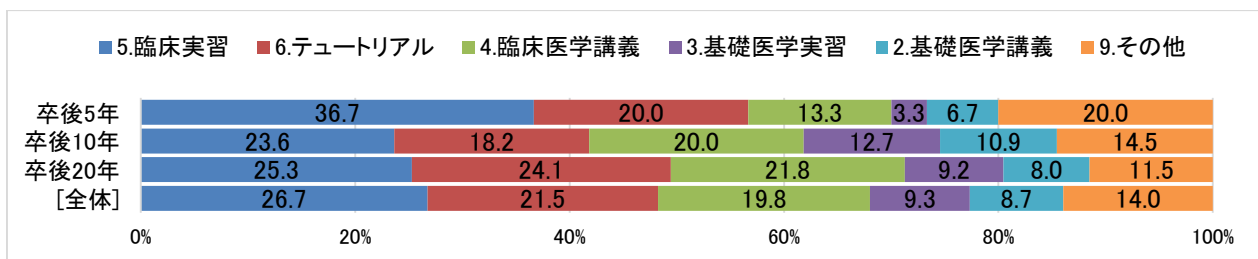


図 29 卒業後 5-20 年 キャリア構築に役立った本学のカリキュラム【単位:%】

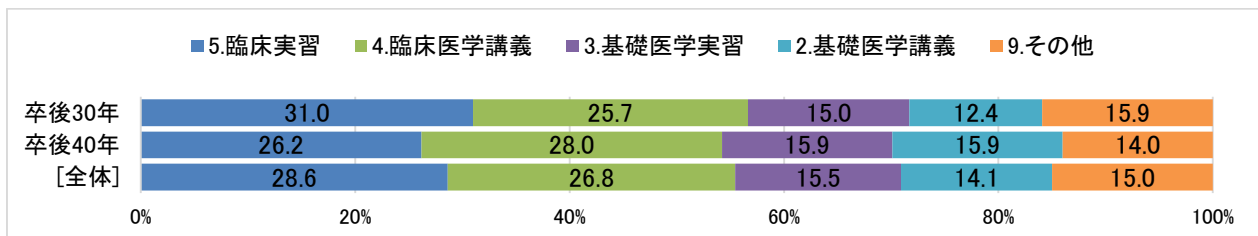


図 30 卒業後 30・40 年 キャリア構築に役立った本学のカリキュラム【単位:%】

キャリア構築に役立った正規課程以外および卒業後の経験

正規課程以外および卒業後の経験の選択肢は、下記の 9 項目であった。

- | | | | |
|------------------------|---------------------------------|----------------------------------|-----------|
| 1.医学部の課外活動 | 2.専門医取得までの研修
(卒業後 1-6 年目くらい) | 3.専門医を取得以降の経験
(卒業後 7 年目以降くらい) | 4.大学院での研究 |
| 4.大学院での研究 | 5.大学院以外での研究 | 6.社会活動 | 7.留学 |
| 8.卒業後の医師としての
仕事そのもの | 9.その他 | | |

「卒業後の医師としての仕事そのもの」29.8%、「専門医取得(卒業後 1-6 年目くらい)までの研修」20.8%、「医学部の課外活動」15.2%の順に多かった。卒業年別では、卒業年が長いほど医学部の課外活動が占める割合が小さい傾向がみられた(図 31)。

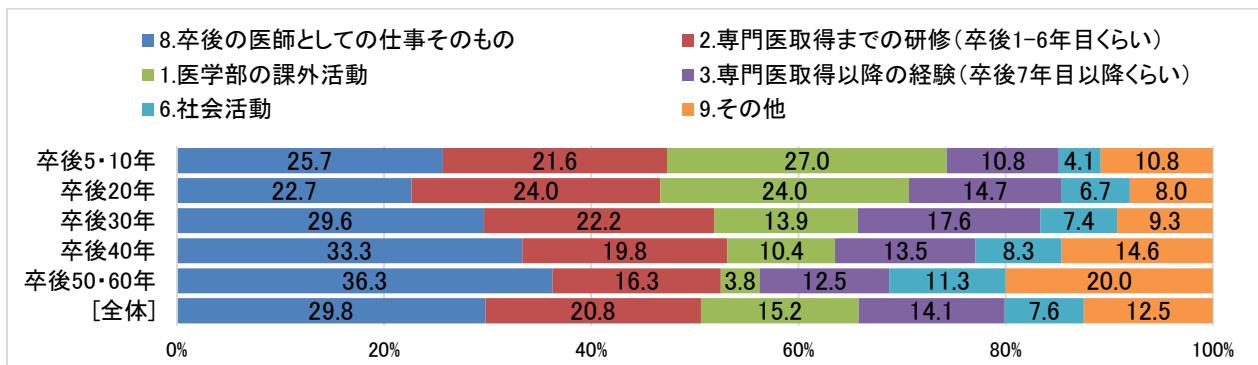


図 31 キャリア構築に役立った正規課程以外および卒業後の経験【単位:%】

入学時の入試区分と奨学金制度の利用

入試区分の内訳を表 11 に示す。

表 11 入試区分内訳【単位:人】

	卒業後						
	5年	10年	20年	30年	40年	50年	60年
一般入試	11	8	12	36	42	29	4
一般推薦	4	5	12	4	0	0	0
指定校推薦	2	4	1	1			

指定校推薦は卒業後 20 年までの集団が対象の項目であるため、卒業後 30 年の指定校推薦 1 名は誤答である。表 12 の通り、奨学金受給者は若干名であった。

表 12 奨学金受給者数【単位:人】

	卒業後						
	5年	10年	20年	30年	40年	50年	60年
1.していた	1	3	0	1	1	4	1
2.していない	16	14	26	40	40	26	2

大学の役割・後輩の育成に期待すること

※多数のご意見を頂き、ありがとうございました。今後の改善への参考とさせていただきます。

4. 本学の理念・建学の精神の継承、母校愛の醸成

以下の項目を意識して医療や活動に取り組んでいるか尋ねた。

大学の理念の実践

「至誠と愛」の心構え

この設問では、『「至誠と愛」とはきわめて誠実であること、慈しむ心であり、患者に接するときの根本的な心構えです。吉岡彌生先生の座右の銘であり大学の理念であるこの心構えを忘れずに医療や活動に取り組んでおられますか。』と尋ねている。全体では「時々意識する」が 40.7%であった。卒業年別では卒業後 5・10年、卒業後 40年は「時々意識する」、卒業後 20年、卒業後 50・60年は「常に行動の規範としている」、卒業後 30年は「頻繁に意識している」の占める割合が大きかった(図 32)。

建学の精神の実践

医師・社会人として高い知識・技能・人間性を磨き続けること

「おおむね意識している」54.0%、「常に意識している」36.3%の順に多く、卒業年別でも同様の結果であった(図 33)。

精神的・経済的に自立し社会に貢献する意思

「おおむね持っている」50.8%、「常に持っている」43.8%の順に多かった。卒業後 20年と卒業後 50・60年は、全体の傾向とは逆に、「常に持っている」の占める割合が大きかった(図 34)。

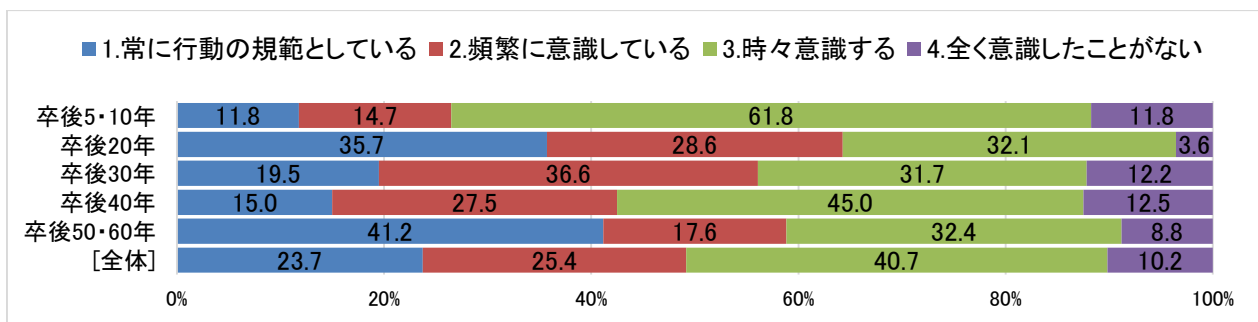


図 32 「至誠と愛」の心構え【単位:%】

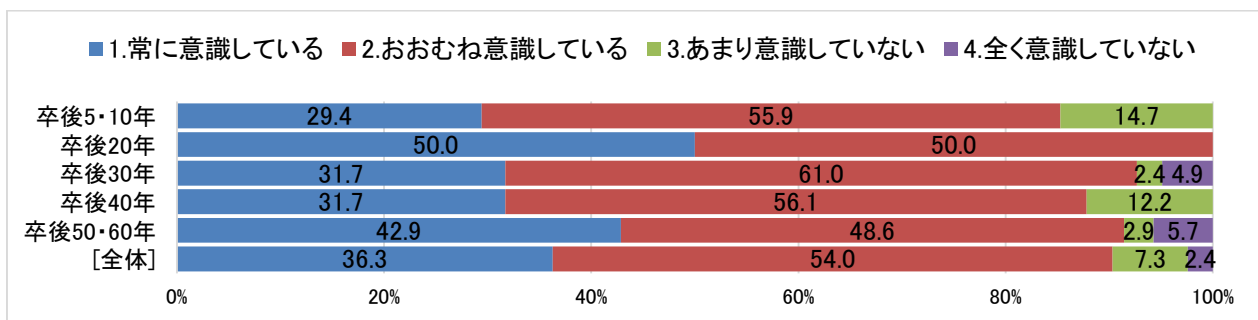


図 33 医師・社会人として高い知識・技能・人間性を磨き続けること【単位:%】

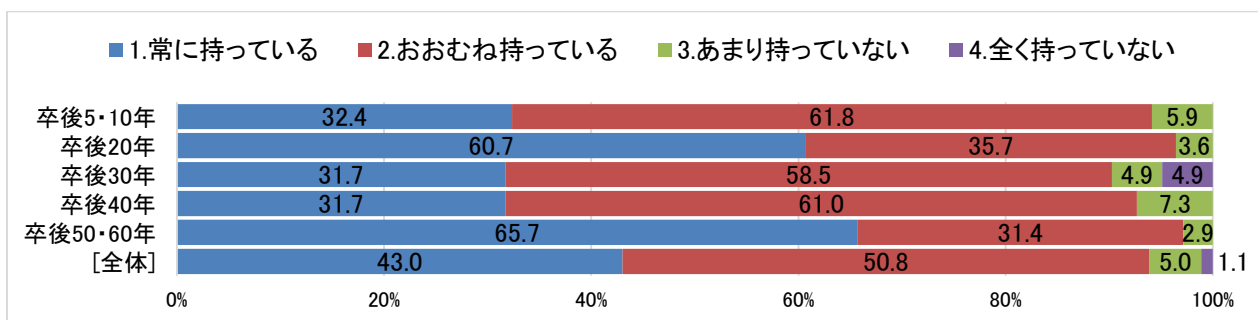


図 34 精神的・経済的に自立し社会に貢献する意思【単位:%】

卒業生の教育参画

本学の学生教育に参加したことが無い人が 63.3%であった。いずれの卒年も半分以上が参加した経験がなく、卒後 40 年は特に参加した経験がない人の占める割合が大きかった(70.7%)(図 35)。

また学生教育への参加に対して、42.3%が「あまりしたいと思わない」、37.5%が「時々したいと思う」と答えていた。卒後 5・10 年から卒後 30 年は、「時々したい」と思うの占める割合が大きいが、卒後 40 年はあまりしたいと思わないが半分以上であった。いずれの卒後年も学生教育への参加を強く希望する人は少ない傾向にある(図 36)。

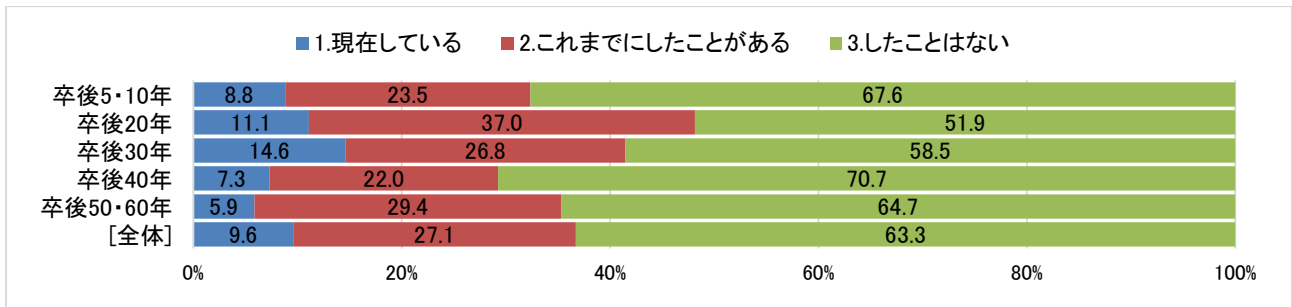


図 35 学生教育に参加した経験【単位:%】

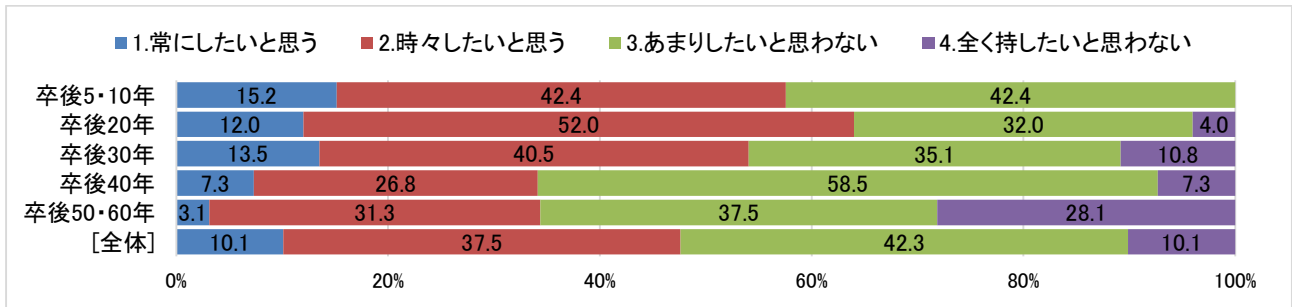


図 36 学生教育参画の意思【単位:%】

子女の教育

縁者(家族、親戚)に本学出身者がいる人は26.3%であった。出身者の内訳は、「母」45.8%、「親戚(伯母、叔母)」37.5%、「姉妹」25.0%の順に多く、卒後5・10年、20年、30年は全体と同様の傾向、卒後40年、50・60年は親戚(伯母、叔母)の占める割合が大きかった(図37)。

自身の縁者が医師を志した場合に本学への入学を勧めたいかについては、該当者76.4%のうち、「学ばせたい」55.6%、「わからない」40.6%、「学ばせたくない」3.8%であった。卒後年別でも同様の傾向であった(図38)。

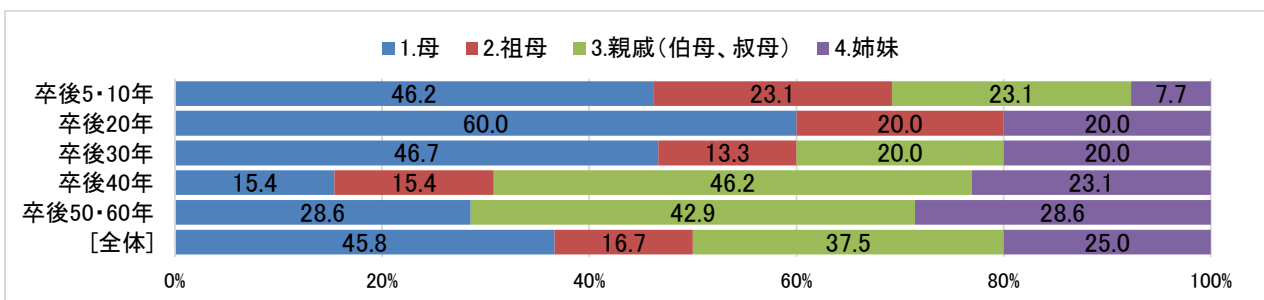


図 37 本学出身の縁者(該当者のみ)【単位:%】

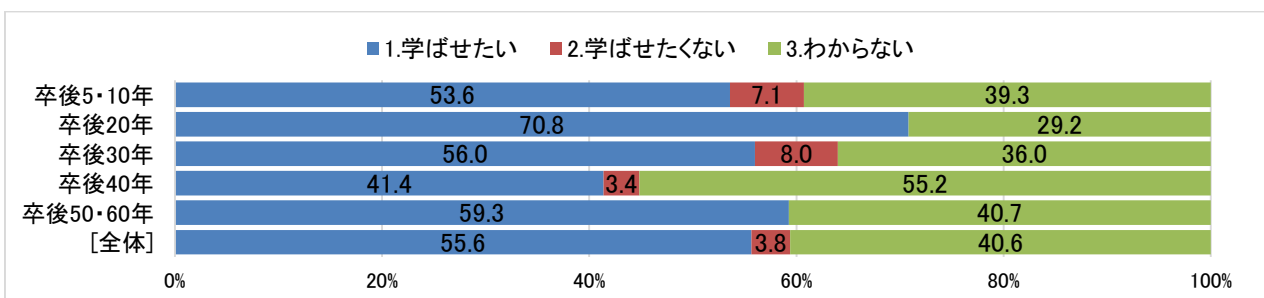


図 38 縁者が医師を志したとき、本学への入学を勧めたいか【単位:%】

5. 卒業後支援に関する要望

既存のリソースの認知度

大学ホームページ

大学のホームページを閲覧したことがある人は 48.6%であった。卒後 20 年で閲覧したことがある人の割合が最も大きかった(図 39)。閲覧していて気づいた点には大学病院のページや法人イントラネットのページに関する記述も含まれていた。太字の記述のように、ホームページを通して本学の活動を知っている卒業生もいた。

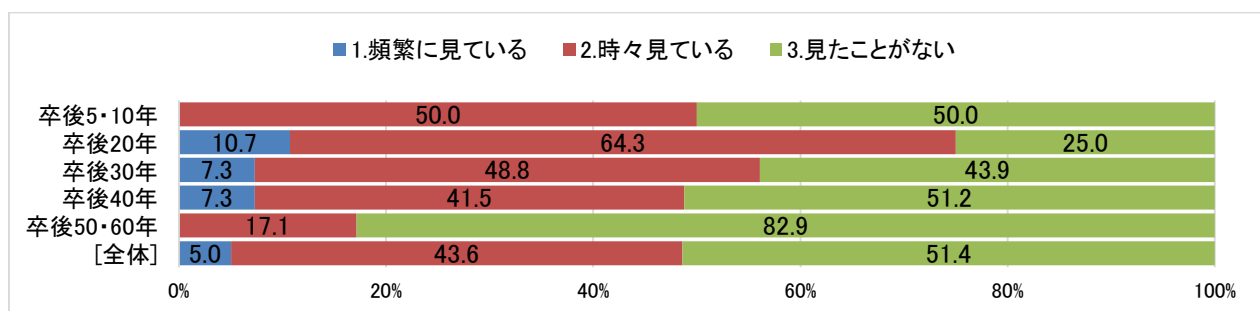


図 39 大学ホームページの閲覧状況【単位:%】

女性医療人キャリア形成センター

活動を知っている人は 44.9%であった。卒後 5・10 年、卒後 50・60 年で「知っている」が約 30%であったが、その他の集団では半数以上が知っていると回答していた(図 40)。

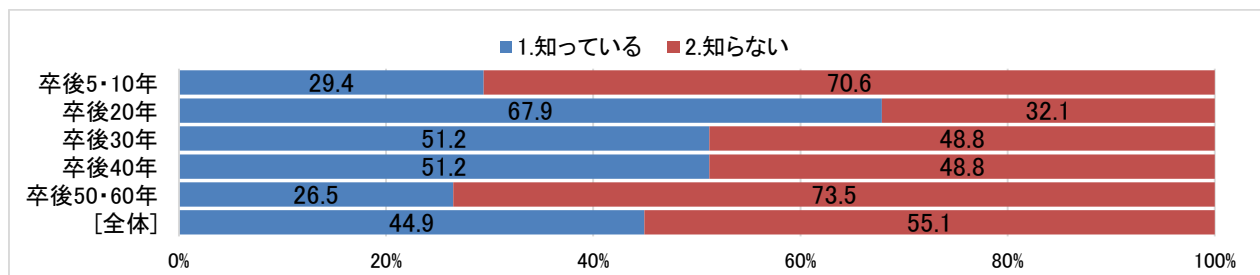


図 40 女性医療人キャリア形成センターの認知度【単位:%】

本学キャリアサポートのニーズ調査

(1) キャリア支援プログラム

この設問でのキャリア支援プログラムとは、「学会発表トレーニング、論文執筆トレーニング、英語診療トレーニング、臨床手技シミュレーション、研究支援等」のことを指している。全体では「ある方が良い」が 60.3%であった。卒後 5・10 年は「あれば活用したい」が 55.9%であった。(図 41)。

(2) 専門医取得・維持のためのサポート

全体では「ある方が良い」が 59.6%であった。卒後 5・10 年には「あれば活用したい」が 64.7%であった(図 42)。

(3) 常勤医・非常勤医(定期・臨時)の求人・求職を登録できるシステム

全体では「ある方が良い」が 62.7%であった。卒後 5・10 年、20 年では、「あれば活用したい」が半数以上であった(図 43)。

以上より、3 項目とも「ある方が良い」という意見が大多数であり、特に卒後 5-20 年では「活用したい」というニーズがあることが示された。

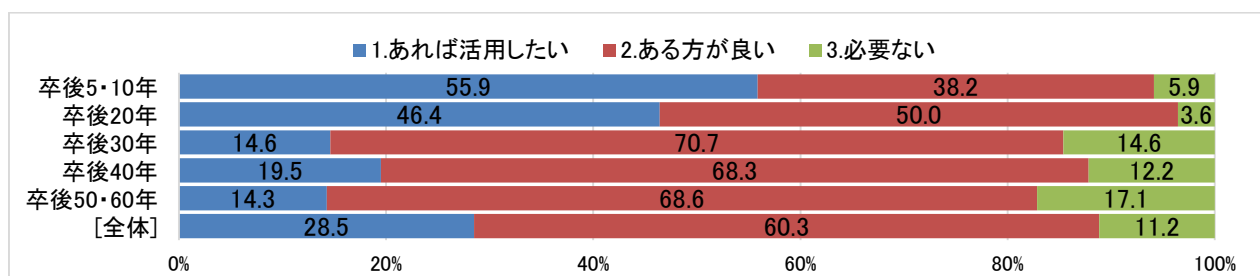


図 41 キャリア支援プログラム(学会発表トレーニング、論文執筆トレーニング、英語診療トレーニング、臨床手技シミュレーション、研究支援等)のニーズ【単位:%】

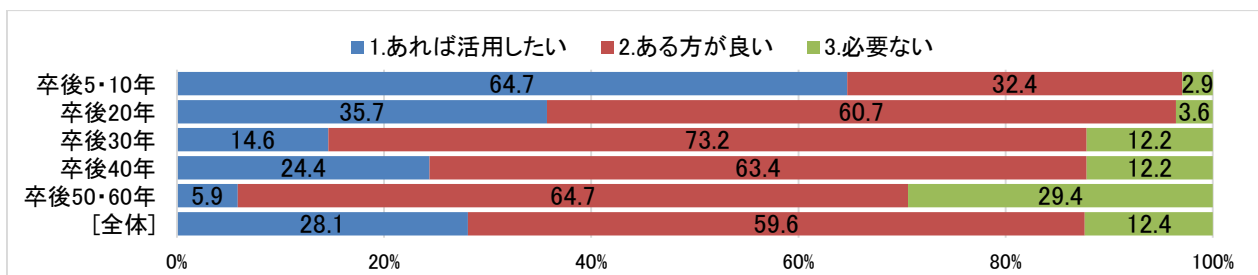


図 42 専門医取得・維持のためのサポート【単位:%】

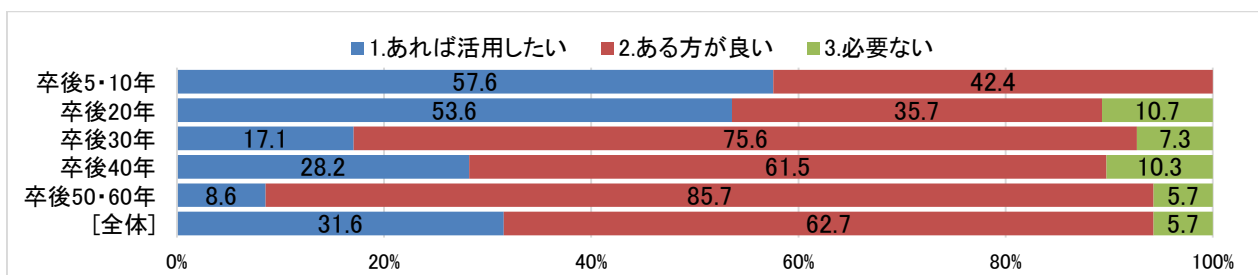


図 43 常勤医・非常勤医(定期・臨時)の求人・求職を登録できるシステム【単位:%】

6. 卒業生の拠点としての大学の意義

※多数のご意見を頂き、ありがとうございました。今後の改善への参考とさせていただきます。

7. 在学生へのメッセージ

※多数のメッセージを頂き、ありがとうございました。在校生へ展開いたします。

8. 本調査への意見

設問の量が多すぎる、最初に設問数、所要時間を明示してほしい、回答画面上に進捗状況を提示してほしいというコメントがあった。

IV.2020 年度との比較

(1)回答回収率

2021 年度回収率は 43.6%で、2020 年度の 50.5%と比べてやや低減した。両年度とも卒後 5 年において回収率が最も低かった。2021 年度は 2020 年度より回答回収期間が 1 か月短いという違いがあったが、図 44 の回答受領状況より、両年度とも回答者の約半数は集計開始から 2 週間以内に回答していた。

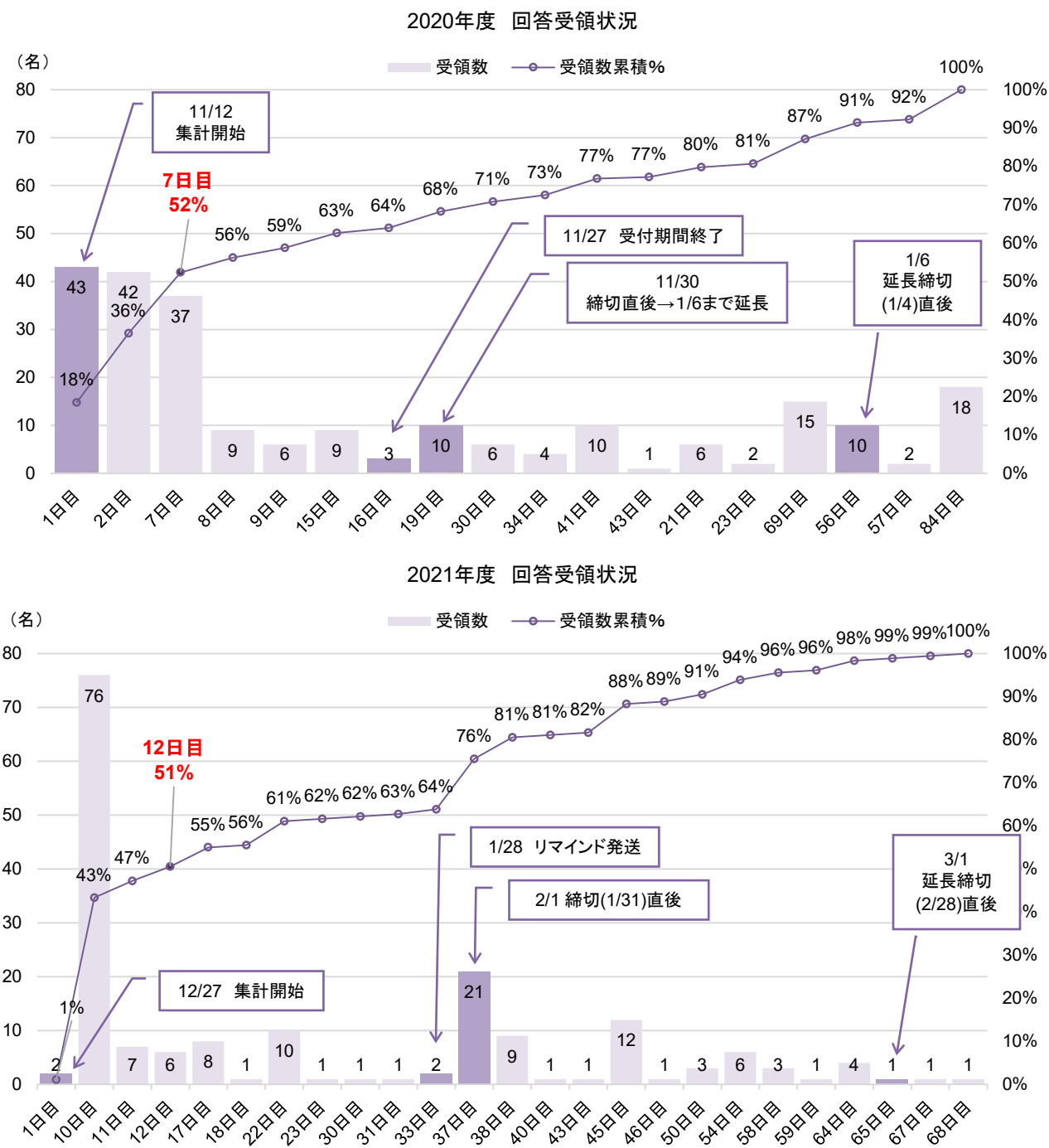


図 44 調査回答受領状況

(2)卒業生の現状[就業・社会活動]

診療科・勤務居住地 両年度とも診療科は内科(20年度 29.8%、21年度 33.0%)、勤務居住地は南関東(20年度 67.1%、21年度 67.4%)が多かった。

雇用形態 全体としては両年度とも常勤勤務者(経営者、管理者、指導者除く)が多いが、卒後20年は非常勤勤務者、卒後30年より上の集団は経営者との回答が最も多かった(図45)。

社会活動 2021年度の参加率は49.4%、2020年度は44.8%であった。社会活動の種類は、両年度とも「校医」が最も多かった(20年度 35.2%、21年度 34.8%)。

コロナ禍の影響 2021年度は2020年度に比べ、「ある」の割合が大きくなっていった(20年度 67.5%、21年度 74.3%)。

収入 2020年度は「1千万円以上2千万円未満」(30.3%)が最も多かったが、2021年度は「500万円未満」に回答が集中していた(33.7%)。

(3)卒業生の現状[プライベート]

いずれも2020年度と同様の結果であった。子育て支援は「ある」が最多(20年度 78.5%、21年度 88.1%)、介護支援も「ある」が最多(20年度 62.2%、21年度 59.2%)であった。現在最も重点を置いている活動は「家族との時間」がいずれも最多(20年度 37.2%、21年度 38.8%)であった。

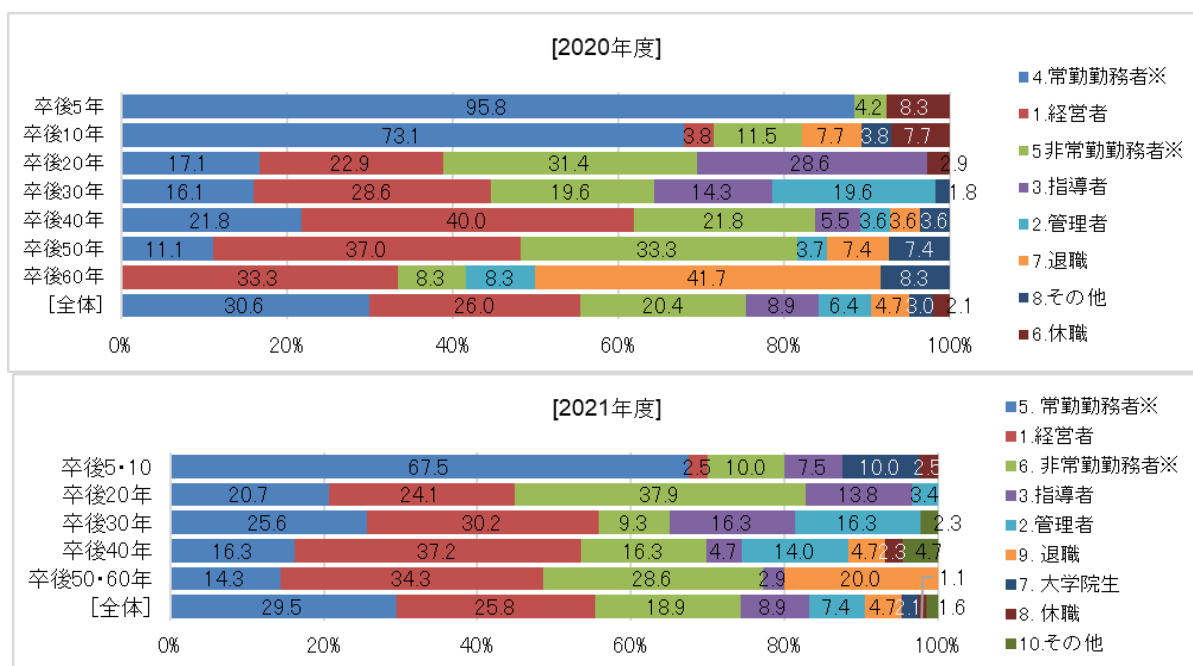


図45 2020年度・2021年度 卒年別雇用形態の構成比※経営者、管理者、指導者除く

(4)卒業後のキャリア構築方法

進路選択 卒業直後の入局もしくは勤務先は、両年度とも約 6 割が「本学関連病院」であり、卒後年が短い集団では「本学関連病院」が 5 割に満たなかった(図 46)。キャリア構築に当たり相談した相手として、両年度とも父(20 年度 26.9%、21 年度 23.9%)、母(20 年度 25.4%、21 年度 21.1%)が多く挙げられていた。**専門医資格** 両年度とも「取得経験あり」が 80%程度。資格を維持している人は 2021 年度 72.8%、2020 年度 66.1%で、両年度とも卒後 30 年以上の集団で維持していない人が見受けられる(図 47)。

学位 両年度とも取得した人は約 4 割であった(20 年度 36.3%、21 年度 39.0%)。

海外在住、留学 両年度とも経験者は約 1 割であった(20 年度 9.6%、21 年度 10.1%)。

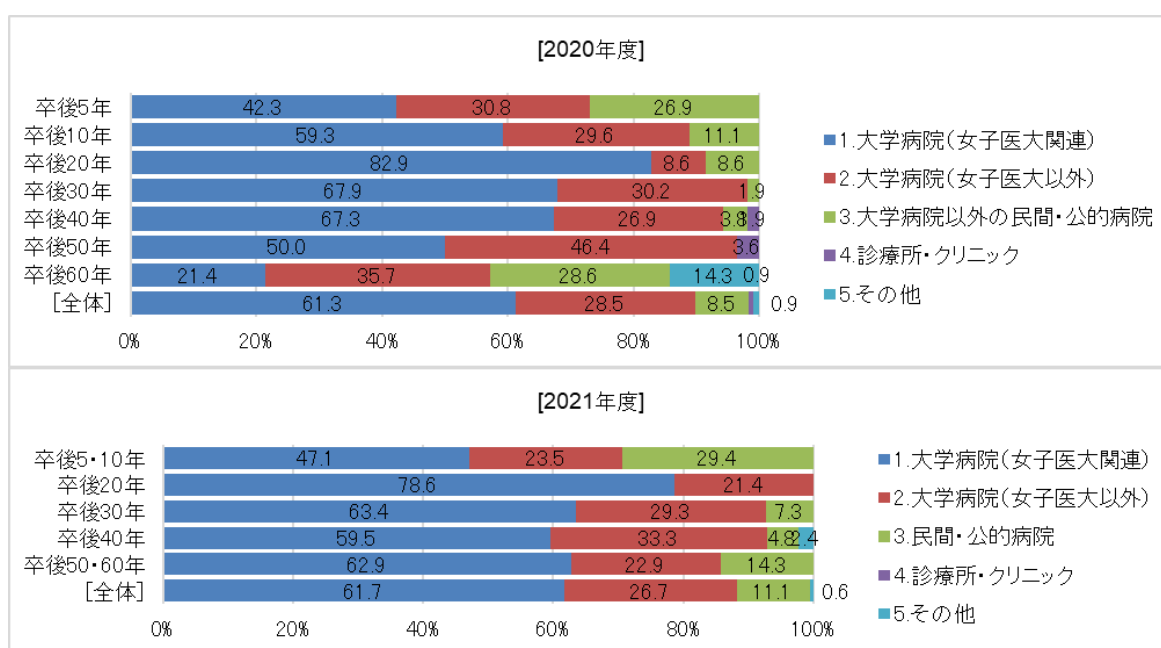


図 46 2020 年度・2021 年度 卒年別卒業直後の入局もしくは勤務先の構成比

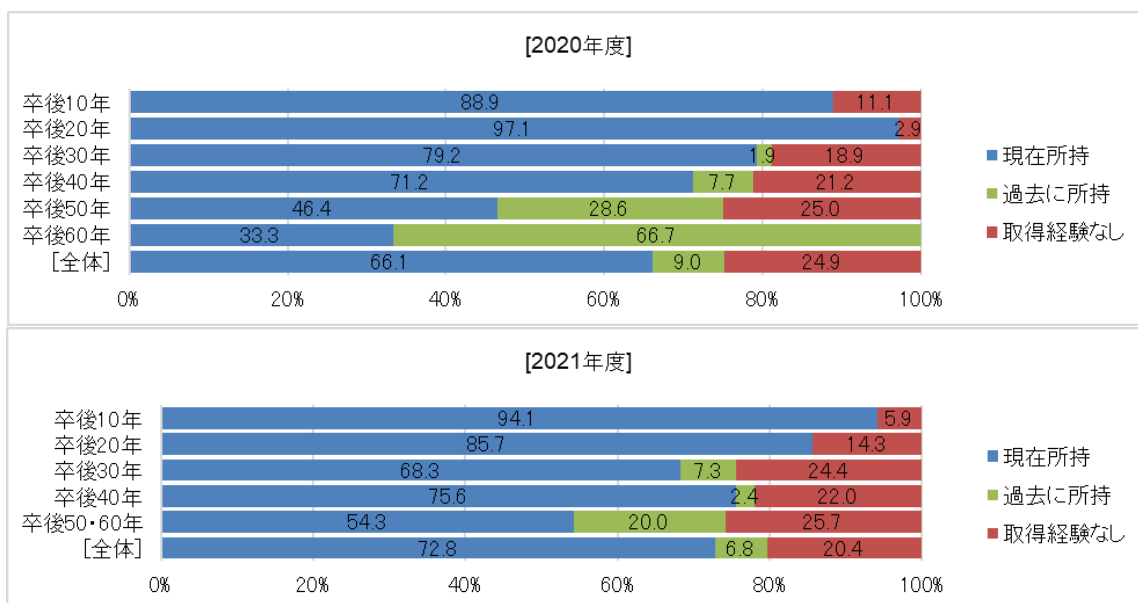


図 47 2020 年度・2021 年度 卒年別専門医資格取得状況

(5)卒業生による本学教育カリキュラム評価

キャリア構築に役立った本学のカリキュラム(テュートリアルは20年以下の集団のみ)

両年度とも、いずれの卒年も概ね臨床実習が最も多く、卒後5-20年ではテュートリアル、卒後30、40年では臨床医学講義が2番目に多かった(図48)。

キャリア構築に役立った正規課程以外および卒後の経験

両年度とも「卒後の医師としての仕事そのもの」が最多、卒後年が長いほど医学部の課外活動の占める割合が小さい傾向が見受けられる(図49)。

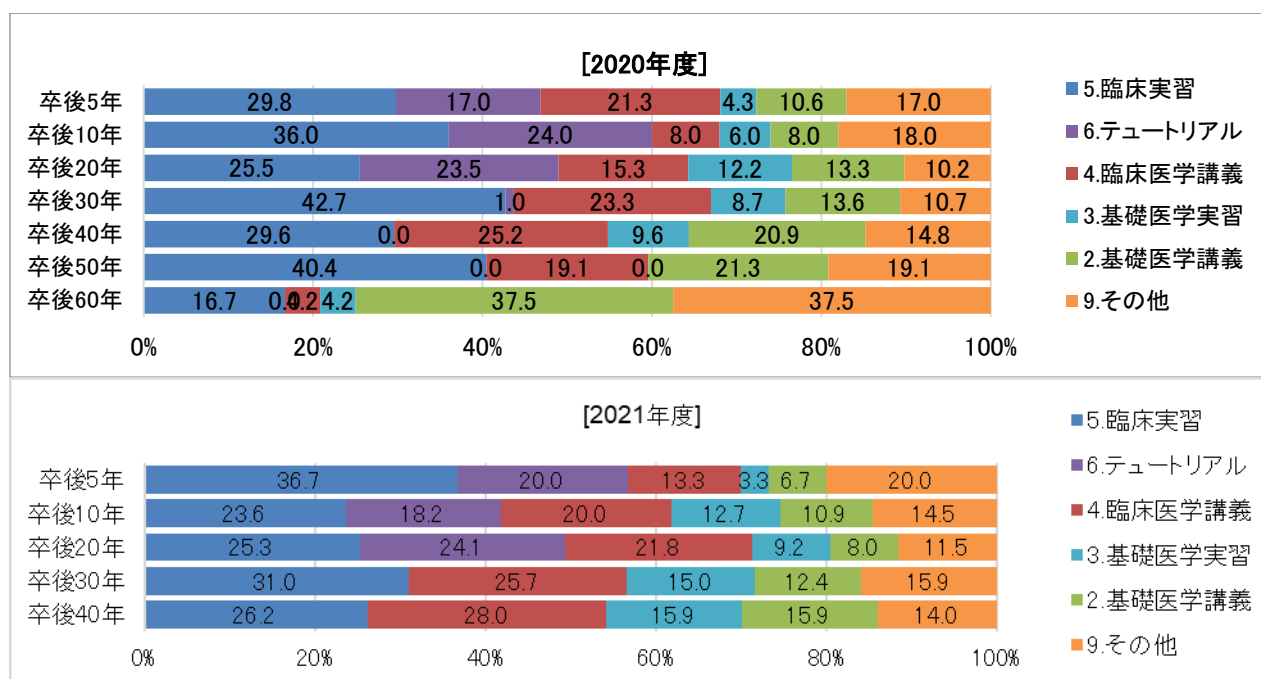


図48 2020年度・2021年度 卒年別キャリア構築に役立った本学のカリキュラム

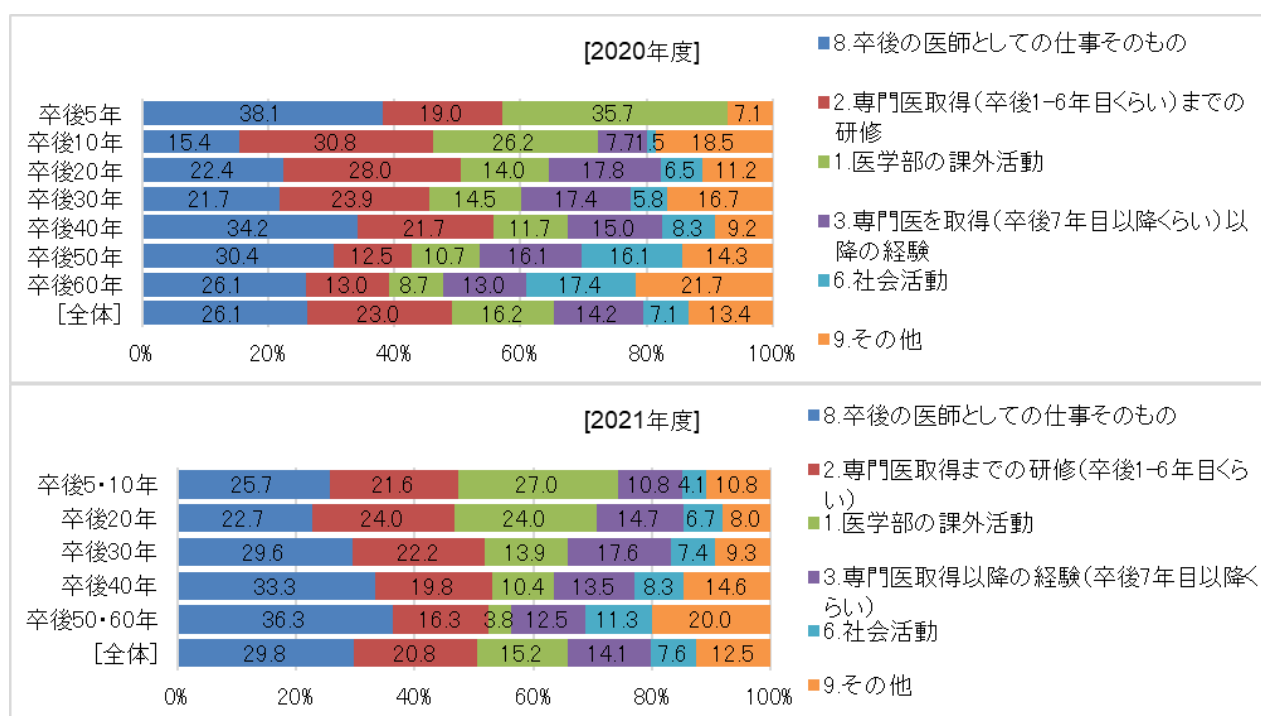


図49 2020年度・2021年度 卒年別キャリア構築に役立った正規過程以外及び卒後の経験

(6) 本学の理念・建学の精神の継承、母校愛の醸成

「至誠と愛」の心構え 両年度とも「時々意識する」が最多(約4割)。2021年度は卒後20年、卒後50・60年、2020年度は卒後30年、50年において「常に行動の規範としている」の占める割合が大きかった(図50)。

医師・社会人として高い知識・技能・人間性を磨き続けること 両年度とも「おおむね意識している」が最も多かった(20年度51.3%、21年度54.0%)。

精神的・経済的に自立し社会に貢献する意思 両年度とも「おおむね持っている」が最も多かった(20年度51.9%、21年度50.8%)。

子女の教育 縁者(家族、親戚)に本学出身者がいる人は、2021年度26.3%、2020年度38.4%であった。

図51の通り、2020年度はいずれの卒年も母が4割程度で、卒後60年は姉妹が50%を占めている。2021年度は、卒後30年以下は母、40年以上は親戚の割合が大きかった。

両年度とも、該当者の約5割が、縁者が医師を志した場合に本学で「学ばせたい」と回答しており、いずれの卒年も同様の結果であった(20年度51.0%、21年度55.6%)。

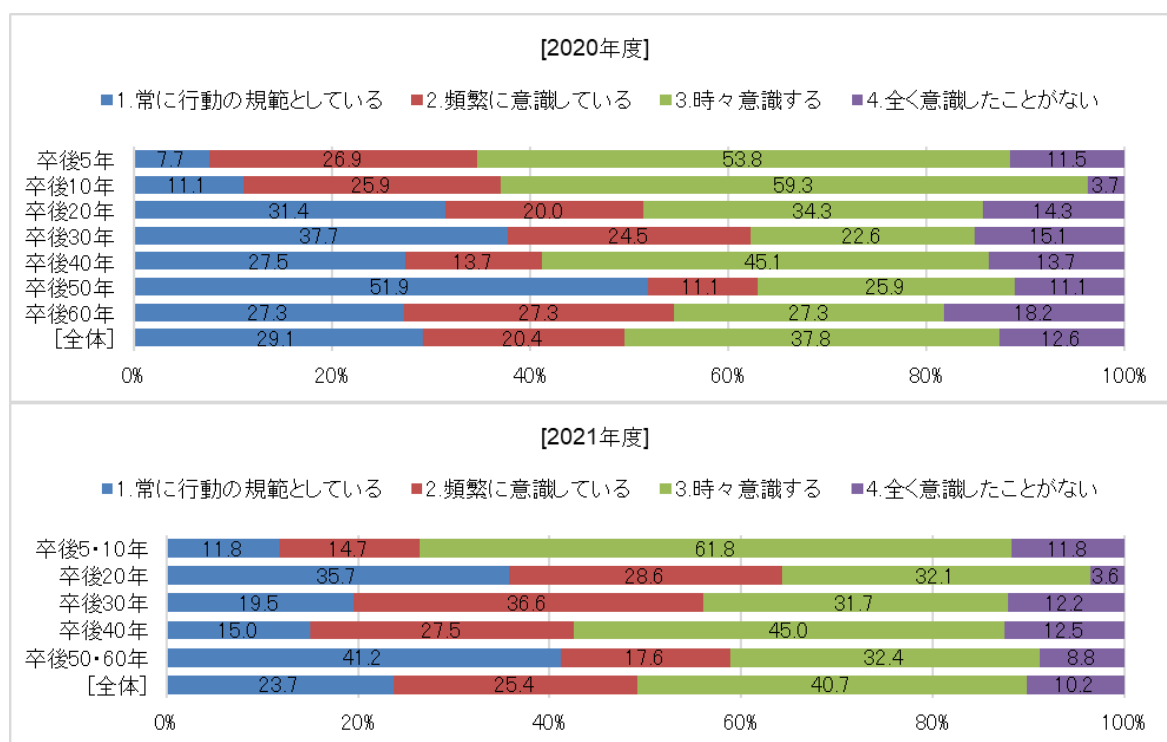


図50 2020年度・2021年度 卒年別「至誠と愛」の心構えについての意識

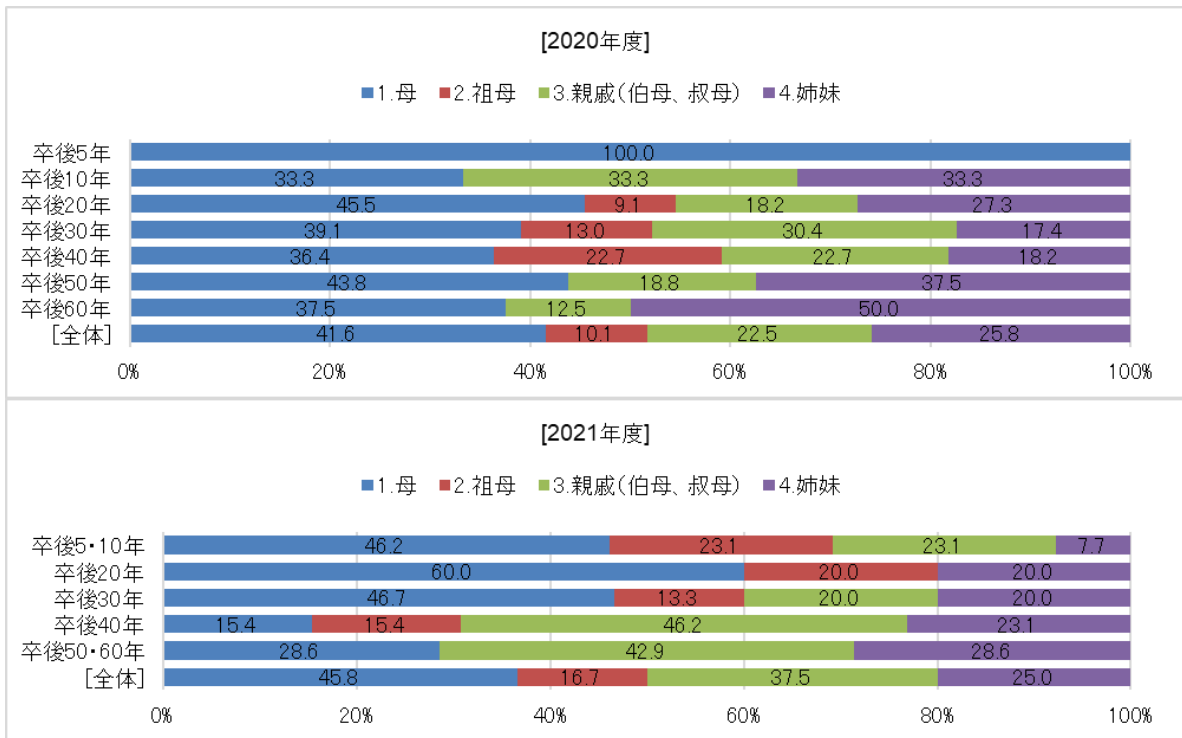


図 51 2020 年度・2021 年度 卒年別本学出身の縁者構成比

(7)卒業後支援に関する要望

本学キャリアサポートのニーズ調査(専門医取得・維持のためのサポートは 21 年度のみ)

(2)キャリア支援プログラム、(3)常勤医・非常勤医(定期・臨時)の求人・求職を登録できるシステムについて、両年度とも「ある方が良い」が全体の約 6 割であった。「あれば活用したい」は卒後年が短い集団ほど多い傾向であった。

V. まとめと今後の展望

回答回収率について

今後の調査における課題の一つに、回答回収率の向上が挙げられる。当初設定されていた受付期間は、2020年度が約2週間、2021年度が約1か月で、締め切り後に1か月ほど延長していた。しかし、p41 図44に示す日ごとの受領状況の結果より、2020年度は7日目、2021年度は12日目に回答者の半数は回答を終えており、締め切り直前に受領数が若干増える傾向があるが、リマインドを発送しても顕著な変化は見られなかった。受付期間を長期化することは回答回収率の向上につながらない可能性がある。

卒業生の現状

p5の診療科、雇用形態、勤務先、収入の回答では卒後5・10年の集団と卒後20年より上の集団で構成比に違いがみられた。またp12の現在最も重点を置いている活動では、卒後20年において家族との時間に重点を置いている人が突出して多かった。この結果から、卒後20年ごろにライフスタイルに変化があると推察される。具体的には家族との時間に重点を置くために雇用形態、勤務先に変化があり、それに伴って診療科のバリエーションや収入の分布に影響が生じている可能性がある。

2021年度と2020年度の比較の結果、卒業生の現状に次のような変化があったことが示された。p42に示す収入、コロナ禍の影響についての結果から、2021年度は2020年度に比べ、収入額の低い選択肢に度数が集中しており、コロナ禍の影響は「ある」の割合が大きくなっていった。コロナ禍の影響の具体的な内容として、患者数の減少という記述が多く見受けられ、収入の減少につながった可能性がある。

卒業生のキャリア構築

卒業直後の入局もしくは勤務先は、全体では半数以上が「本学関連病院」であったが、卒後年が短い集団では「本学関連病院」が5割に満たず、近年は大学に残らない傾向にあることが明らかになった(p16)。専門医資格の取得経験のある人は8割程度で、資格を維持している人は7割であった(p20)。学位を取得した人は約4割、海外在住・留学経験者は約1割であった(p21, p23)。

卒業生による本学カリキュラム評価

キャリア構築に役立った本学のカリキュラムは、いずれの卒年も「臨床実習」が多く挙げられていた。卒年によって2番目に役に立ったカリキュラムに違いがあった。卒後30、40年では臨床医学講義が多く挙げられているが、テュートリアル教育が導入された卒後20年以下の集団の回答結果はテュートリアルが次点となっており、テュートリアル教育が高く評価されていることが明らかになった(p24)。

臨床実習に関連して、本学の教員を対象とした調査の結果から、次の問題が懸念される。本学では2021年度の前期に、教員を対象として「教育カリキュラムに関するアンケート」を実施した。

その結果、回答者の 28.4%が臨床実習の負担が大きいと答えており(図 51)、具体的には教員一人当たりの担当学生数が多いという声が多く挙げられていた。卒業生からの評価、期待に応えるため、臨床実習の質を維持できるような環境を整備する取り組みが望まれる。

6-5 臨床実習に関する負担が大きいと思われませんか
278 件の回答

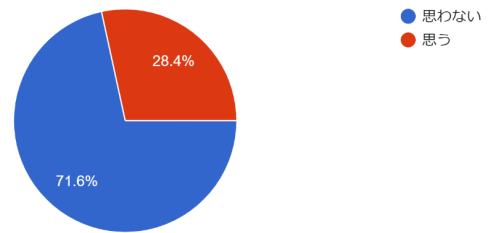


図 51 2021 年度前期教育カリキュラムに関するアンケートより[問 6-5 臨床実習にかかわる負担が大きいと思われ
ますか]

本学の理念・建学の精神の継承、母校愛の醸成

建学の精神である、「医師・社会人として高い知識・技能・人間性を磨き続けること」、「精神的・経済的に自立し社会に貢献する意思」はそれぞれ半数以上が「おおむね意識している」、「おおむね持っている」と回答しており、継承・実践されているといえる(p29)。しかし、本学の理念である「至誠と愛」の心構えは、卒後 20 年、卒後 50・60 年においては「常に行動の規範としている」の占める割合が大きかったが、全体では「時々意識する」が約 4 割で、頻繁に意識されているとは言い難い結果であった(p28)。母校愛の調査項目では、自身の家族や親戚が医師を志した時に、本学を勧めるか尋ねた。いずれの卒年も該当者の 5 割が本学で「学ばせたい」と回答しており本学での学修を好ましく捉えていることが分かった(p30)。

卒業後支援に関する要望

卒業生に対するキャリアサポートとして、キャリア支援プログラム、専門医資格の取得・維持支援、卒業生向けの登録制求人システムのニーズを調査した。いずれのサポートも、卒業生の多くが導入に好意的であった(p34, p35)。卒後年が短い集団は実際に利用する可能性が高く、卒業後の母校との接点になりうると考えられる。

VI.2021 年度実施体制

卒業生調査実施責任者:理事長・岩本絹子、学長・丸義朗、

医学部長・石黒直子、看護学部・小川久貴子

実施統括:統合教育学修センター(センター長・西井明子)・教学 IR チーム

設問内容担当:医学部 石黒直子、野原理子、

看護学部 小川久貴子、濱田由紀

実施担当:山内かづ代、今中清絵、辻野賢治 データ入力:今中清絵

データ集計:平野万由子

報告書作成:平野万由子、山口俊夫、辻野賢治